

Doc. 3076

(155)

Handwritten scribbles and marks on the right edge of the page, including a small circle and a larger, irregular shape.



No. 24

# 皇國必勝論

蘇峯 德富猪一郎著

3076

Proj. No.	<u>318</u>
S. A. No.	_____
Sack No.	_____
Item No.	<u>14</u>

版藏院書治明

皇國必勝論

蘇峯 德富猪一郎著

Doc # 3076





序

本書は昭和十七年の末に始まり、昭和十八年八月に終る期間に於ける、予の大東亞戦争を中心として各方面より、各問題に就き觀察したるものを輯めたるものである。其の問題は一ならざるも、其の大趣旨は一貫してゐる。これ「皇國必勝論」の名出て來りたる所以。

予は英國の政治には多大の興味を有し、殆んど半生の精力を其の研究に傾け盡した。米國に至つては英國ほ



どではないが、然も予は佛人トツクヴィルの「米國民政論」の如きは、明治十五年來これを愛讀した。又たブライスの「米國共和論」の初めて世に出づるや、日本に於て最初にこれを購讀したる者は、恐らくは予でなかつたとしても、予も亦た其の一人であつたと信ずる。而して社中をしてこれを翻譯せしめ、「平民政治」と題してこれを民友社より刊行せしめた。これも明治二十年代の初期であつて、爾來米國に就ても、英吉利に次ぐの關心を以てこれを觀察してゐた。本書に掲げたるものは、其の多年に亙る研究の一端に過ぎない。他日機會を得ば、再びこれを語る

を得るかも未だ知るべからず。然も果して其の機會ありや否やは、今から豫言は出來ない。

本書の大半は八重樫東香女史これを筆記し、其の小半は岡本正徳君これを筆記し。而して本書は實に岡本君の編纂したるものである。併せてこれを記して謝意を表す。

昭和十八年十一月念九

蘇峰 徳富猪一郎



目次

伊太利政變と皇國

- 一、伊太利政變の由來……………(三)
  - ◇歴史上の日伊友好關係◇伊太利國民の力戦苦闘◇獨逸の援助◇爲政者の責任◇伊太利建國の三傑◇伊太利再造者ムツソリーニ
- 二、伊太利は何處に行かんとする……………(二)
  - ◇アングロ・サクソンの宣傳方策◇横暴なる米英の對伊要求◇古羅馬精神と伊國回復の途
- 三、國策上の重點主義……………(一七)



◇日獨伊同盟完遂の本義◇戰略上の重點主義◇アングロ・サクソンの亞細亞  
奴隸觀◇必勝の信念

#### 四、便乘主義の横行

◇犠牲的精神の不足◇煙草か穀類か◇耽溺と闇取引

#### 五、常時乎、非常時乎

◇官界一部の陋習◇精神力と物質的充實◇思想戦の鐵壁を築け◇皇民一億皆  
英雄

### 敵國解剖篇

#### アングロ・サクソンの正體

◇米英崇拜の陋習◇米國の壓迫と日本の反撥◇アメリカ屋の看板◇日本は果

して東洋の英國なる乎◇人種融合に關する日英の相違◇皇室中心と議會中心  
◇アングロ・サクソンの品定め◇一貫したる海賊根性◇買収で終始せる英國  
憲政◇物質萬能を脱却せよ

#### アングロ・サクソンの宣傳術及び思想戦

◇無形戦争◇ノースクリフの誇言◇一大宣傳屋ルーズヴェルト◇宣傳の旨味  
を嘗めた英米◇英國宣傳本部の暗躍◇狐狸同盟◇戦時に於ける虚偽◇徹底せ  
るデマ宣傳◇九十九敗一勝◇被征服者英國◇自から欺く米國◇米英宣傳術の  
綱領◇我國に對する宣傳◇伊國抱込みの實例◇ドイツ國民を瞞着◇照顧脚下  
◇國內思想の統一

#### 世界史上の一大悲劇

◇徹底せる海賊主義の因果◇英人による英國亡滅論◇同族相喰ひ◇沒理想の  
英國◇英國の政論◇土を離れ宗教を離る◇政黨亡國◇空論亡國◇英國の癡愛



蘭◇植民地の土崩瓦解◇英國に於ける君主制◇元首の個人主義

英國悲劇餘論

(一六)

◇猶太禍◇英國文學と英國の興廢◇自己陶醉の英國◇醉氣骨に徹す

國民精神昂揚篇

神人合一の盛事

(三三)

山本五十六死せず

(三六)

米英擊滅二詩

(三九)

大詔奉戴の過去現在未來

(四〇)

◇世界史上の新紀元◇わが義戰聖戰◇米國の利己主義◇一年間のわが戰果◇

國內思想の良化◇前途の大光明◇怖れず侮らず◇質と量と◇精神鍊成の要務  
◇長期戰的性格◇争地は航空基地◇列強の首領◇米國大統領の野心◇内閣を  
動搖せしむる勿れ◇吏道の刷新◇官吏の廉恥心と人心の統一◇敗北思想の撲滅

大東亞戰開始第二の新年を迎へて

(四一)

◇君臣父子の恩愛◇大東亞氣分◇世界的な新秩序(一)◇世界的な新秩序(二)

物心兩面に於ける米英擊滅の戰爭

(四七)

◇戰爭目的の三階段◇所謂る米英の戰爭目的◇アングロ・サクソン三個の敵

◇獨ソ及び日ソの關係◇米英側の離間中傷策を警戒せよ



伊太利政變と皇國



## 一、伊太利政變の由來

### 歴史上の日伊友好關係

我等は伊太利に同情する。わけて從來伊太利の指導者であつたムツソリーニ前首相に同情する。伊太利はわが友邦であり、日獨伊防共協定を締結せぬ以前からの友邦である。歴史的に考ふれば、日本國民と伊太利との交渉は、わが戰國時代に遡る。九州の大名有馬、大村諸氏が特使伊東、千々岩等を羅馬に派してより、徳川初期に伊達政宗が支倉常長を羅馬に赴かしめたる歴史は云ふも更なり、近くわが滿洲事變、支那事變に際しても伊太利は常に我に對して極めて良好の態度を持してゐた。滿洲國を新國家として承認したるも伊太利であり、支那事變に際し常に我に同情を表し、中立國としての立場に差支なき限りに於て我に友好の誼を示したるも伊太利であつた。彼を想ひ、是を思へば、我



等は伊太利の政變には實に多大の同情を傾けざるを得ない。

### 伊太利國民の力戰苦闘

伊太利の政變は世界に於て殆んど青天の霹靂であつた。固より樂屋から觀察したる人々は、早晩此の事あるべしと心配してゐたに相違なく、若しくは期待してゐたに相違なかつたであらうが、然し此の政變が斯の如き卒然、俄然、而して猛然たる勢を以て爆發したることは、恐らくはムツソリーニ氏當人でさへも意外であつたと信ぜらるゝ。然し事ここに至りたるには自から已むを得ざる事情がある。我等は此の事情を審らかにして、實に伊太利が人知れぬ難境に陥り、苦痛を嘗め、遂に餘儀なくかゝるせつば詰つた位置に自から落ちたことに向つて酌量するところあらねばならぬ。極めて手短かに云へば伊太利は力戰苦闘した。けれども人的資源に於ても、物的資源に於ても不足である。人口は獨逸の半ばを出でない。風光は明媚であるが鐵にも石炭にも恵まれてゐない。而して其の國防線はアルプスより延いて地中海に出で、地中海の殆んど全部及び其の沿線であ

る。其の地形から云へば何れの方面からも國を護るに困難である。アルプスの險も、北狄人が羅馬帝國の末路侵入以來、幾度か越えてゐた。況んや今日の如き飛行機が戰闘の唯一と云はざるも主なる利器となつてゐる時代には、アルプスの天險などは問題でない。而して其の地中海及び沿岸に於ては、到る處英米の進攻に向つて殆んど解放せられてゐると云ふも不可でない。其の地理斯の如く、其の資源斯の如く、而して之まで兎も角も持ちこたへたるは、全く伊太利國民の力戰苦闘に因ると云はねばならぬ。慾を云へば限りがない。注文をつくれれば幾許もある。然も我等は公平に商量して、伊太利を咎めるよりも、寧ろ伊太利に向つて氣の毒千萬と思ふ。

### 獨逸の援助

友邦獨逸が伊太利に向つて戮協を吝まなかつたことは、事實が之を證明してゐる。獨逸は北阿一帶に於て、また地中海、多島海に於て、またシチリヤ方面に於て出來得る程度に於て伊太利を援助した。其の援助は有力であり有効でもあつた。然も獨逸は東部戰



線に於て重大なる敵を控へてゐる。又た獨逸の占領したる凡ゆる地域の防禦にも兵力が必要である。更に自國の防禦も亦た意とせねばならぬ。斯る場合に於て獨逸が伊太利を援助するために幾許の犠牲を拂うたかといふことは、常識を以ても判断することが出来る。然もそれが長鞭馬腹に及ばなかつたのは、全く致し方がない。我等は伊太利人が獨逸の援助が不足であつたなどといふことを啣つべき理由がないといふことを認め、同時に伊太利がよく此の事情を諒察してゐることを信じてゐる。其の證據には、ムツソリーニ、ヒットラー兩巨頭の交情は終始一貫未だ曾て渝ることがなかつた。

### 爲政者の責任

斯る場合に於て政變は出で來つた。此の政變の顛末に就ては我等は之を詳らかにしない。たとひ知り得る所あるも、之を今日に語るは尙ほ早しとする。故に姑らく常識的に考察せんに、伊太利が内外危急に迫つてこゝに所謂政權奉還論が発生したることは無理もないことと思ふ。政治家は如何なる場合に於ても國家の安危に任ぜねばならぬ。た

とひ自己の過失でないとしても其の責に任ずることは當然である。支那では地震があつても、日蝕月蝕があつても、若しくは寒暑風雨其の節を失うても、みな宰相が其の責に任ずることとなつてゐた。況んや人事に於てをやだ。されば從來の執權者ムツソリーニ首相に對し政權を伊太利皇帝に奉還すべしとの意見が湧き出でたるも、強ち無理とは思はれない。少くとも不思議ではない。若し強ひて類例を擧ぐれば、日本に於ても慶應三年十月、二條城に於て小松帶刀、後藤象次郎等が徳川將軍慶喜に向つて大政返上を勸告したるの例もある。固より日本と伊太利とは國體も相違し、國情も相違し、之を同一視することは出来ぬが、少くとも之を對照することは出来る。日本は此の政權奉還によつて維新回天の事業完成の端緒を開いた。但だ伊太利は之に依つて如何なる事を來たすべきか、之が我等の語らんと欲するところである。

### 伊太利建國の三傑

政權奉還は伊太利に於て興廢存亡の十字街頭に立つものである。日本の如く之に依つ



て伊太利再生復活の曙光を見るか、否か。伊太利としては進むも困難であり、退くも困難である。既に進退共に困難とすれば、此の上はただ萬難を排して突進するの一あるのみ。我等は伊太利國民に向つて説法せんとする者ではない。然も我等が伊太利國民に對する同情は、我等が言はんと欲するところを言ひ竭さずしては止む能はぬ。我等は伊太利の歴史に就て特別の關心を持つてゐる。それは伊太利の大半が統一せられ、ビクター・エマヌエレが伊太利國王の位に即かれたのは一八六〇年にして、實に我が萬延元年、井伊大老が櫻田門外に於て水戸浪士及び薩人等に頭を授けたると同年である。而して伊太利全國が統一せられ、其の全國の君主として位に即かれたるは一八七〇年即ち我が明治三年である。斯の如く伊太利の統一は恰も我が維新と時代を同じうしてゐる。斯くして其の統一を成就したる伊太利の建國三傑も亦た我が維新の三傑と稍同じきものがある。ガリバルジイの膽勇は或は西郷南洲に比することを得べく、マヂニイの理想は木戸松菊のそれに比することを得べく、カブウル伯の政治的手腕は大久保甲東のそれに比することを得べし。固より西郷南洲の如きは其の識見、雅量、人格何れの方面より見てもガリ

バルジイと同一視すべきものではない。然も身を挺して難に赴くの一事に於ては兩者自から相類するものがある。世間ではマヂニイを以て全く自由主義の結晶となすが、マヂニイの自由主義は決してアングロ・サクソン人の唯物的自由主義ではなかつた。彼が解したるところの自由主義は、最善最賢の指導者に依つて一切を通じたる一切の進歩と定義してゐる。されば彼の理想は殆どブラトンの理想と一致してゐる。然るに爾後の伊太利は如何。所謂る立憲政治を創設して以來、伊太利は殆んど職業政治家、野心政治家の喰ひ物となり、自由主義に中毒し終つた。

#### 伊太利再造者ムツソリーニ

伊太利が第一次世界大戰に對する態度は必ずしも伊太利の名譽と稱すべきものではなかつた。伊太利は長い間同盟國に與せんか、協商國に與せんか、舊盟に従つて獨逸に與せんか、舊交を温ねて英國に與せんか、遲疑猶豫洞ヶ峠に立つてゐた。而して第三者は伊太利は其の一國を双方に競賣りし、最も高値に賣りつけたといふ評語さへ下すに至つ



た。之は伊太利人に取つて侮辱であつた。けれども之を拂拭すべき方便は無かつた。而して其の高値に賣りたるものはグエルサイエ條約に依つて全く水泡に歸した。云はばアングロ・サクソンに一杯喰はされたのだ。其の結果伊太利國內は不平、不満の雰圍氣に包圍せられ、共産主義、サンジカリズムなどが横行し、遂に國內の秩序は全く紊亂し、國王は其の尊嚴を失ひ、國民は其の自信を失ひ、煽動者は勞働者を教唆して遂に工場管理を敢てせしむるに至つた。まさに是れ伊太利は土崩瓦解の域に瀕した。其の時に於て慨然起つて伊太利に活を入れ、指導精神を興へ、伊太利を再造した者はムツソリーニ其人であつた。政治界は元來忘恩である。政治家は始めより其の覺悟をせねばならぬ。

我等はムツソリーニ前首相が今日如何なる心境を持つてゐるかを知らぬ。然もムツソリーニ前首相の功は伊太利三傑の功を一人で併せたのみならず、更に之に加ふるものがあつたことは今日に於て之を斷言するに憚らなす。

## 二、伊太利は何處に行かんとする

### アングロ・サクソンの宣傳方策

凡そ世界に於てアングロ・サクソン人ほど宣傳術の巧妙なる者はない。彼等は常に戦はずして勝つ手段を講じてゐる。それは即ち宣傳である。即ち對手國の人心を攪亂し、其の國民的一致を破壊し、互に相反目せしめ、互に相猜疑せしめ、互に相憎惡せしめ、互に相摩擦せしめ、遂に國內に於ける葛藤に心を奪はれて却て國外に於ける敵を忘却するに至らしむる手段である。前世界戦争に於ても此の手段で遂に勝利を博した。従つて英國に於ての殊勳者はゼリコ、ピーティの海軍提督でもなく、キツチナー、ヘーグ、ロバートソンなど軍政及び參謀總長、司令官の徒でなく、却て宣傳本部クリュー館の總裁であつたノースクリフ卿及び其の部下の宣傳諸文士、諸新聞記者であつたと云ふも誇言



ではない。即ち現時に於ても亦た其の通りである。伊太利に對しては曰く、民主國は伊太利國民を敵とするものではない、但だムツソリーニ及び其の黨與のファッショを敵とするものである。獨逸に對しては曰く、決して獨逸國民を敵とするではない、ヒットラー及びナチスを敵とするものである。苟くもムツソリーニを離れ、ファッショを離れ、ヒットラーを離れ、ナチスを離るゝに於ては、同一基督教國民として兄弟友愛の情を以て相抱擁せんのみと。而して我が日本に向つても亦た同様の宣傳を爲しつゝある。事は機密に屬するを以て今茲に掲げざるも、要するに我が金甌無缺の國家に向つて楔を打込まんとするものである。

#### 横暴なる米英の對伊要求

我等は果して伊太利國民が此の宣傳術に乗りたるや否やは知らない。我等は毫末も伊太利國內の政治に就てかれこれ批評の言を挟まんとする者ではない。さはあれ伊太利國民に向つて、少くとも將來に於て此の宣傳術に對し十二分の警戒を期待するものである。

る。反樞軸國の金棒曳きであるルーズヴェルト、チャーチルの徒は惟へらく、伊太利は既にムツソリーニを追うた。ファッショを消解した。此に於て手を拍つて曰く、我等の事成ると。而して彼等は果して如何なる態度を以て伊太利を迎へんとしたるか。彼等が伊太利に要求したる條件は七ヶ條である、曰く、(第一)伊太利陸海軍が即時抗戦を停止すること、(第二)獨逸政府との協力を即時停止すること、(第三)ユーゴスラヴィヤ、ギリシヤ、アルバニヤ、フランス各國駐屯の伊太利軍を即時撤收すること、(第四)伊太利國內に反樞軸軍政府の樹立を認めること、(第五)ムツソリーニ前首相其他ファシスト黨領袖を反樞軸軍に引渡すこと、(第六)伊太利國內に於ける武器を取締ること、(第七)反樞軸軍の捕虜を即時引渡すこと。而して更に伊太利全土を獨逸軍に對する作戦の基地として要求した。此の七ヶ條の一ヶ條でさへも伊太利は獨立國として其の面目に懸けて承引は出来ない條件である。況んや七ヶ條を挙げ、更に之に加ふるに伊太利全土を舉げて獨逸軍に對する作戦の基地と爲さんとするに於てをやだ。なほチャーチルは曰く、伊太利國民は自分のスूपで料理しなければならぬと。ルーズヴェルト及び反樞軸軍司令



官アイゼンハワーも殆んど同様の意味にて無條件的降伏を要求した。又た英國國璽尙書クランボーンも無條件降伏と名譽の講和とは同意語であると放言した。更に米國々務長官ハル及び英國外務大臣イーデンの徒の言ふことも異口同音に無條件降伏以外に何等の意義を持つてゐない。若し萬一にも伊太利の國民中に反樞軸國と講和の望みでも抱いた者があつたとすれば、彼等は啞然として自失するであらう。政變以後幾もなくして伊太利の言論界が猛然として反樞軸國に對する氣焰を擧げ來つたことも決して偶然でな

### 古羅馬精神と伊國回復の途

要するに伊太利は目下困難の絶谷に墜落してゐる。此の時に於て彼等は實に進退兩難と云はねばならぬ。然も彼等の活路はたゞ一あるのみ。それは即ち彼等の祖先たる古羅馬人がカルタゴ人との戦争の歴史を繰返すことだ。即ち剛健勇武、百折不折の羅馬精神を蘇生復活することだ。英米兩國は古への所謂カルタゴである。カルタゴは商業第一

主義であり、航海貿易を事とし、黄金萬能であり、兵士の如きは凡有る方面より金錢を以て之を募集し來つたる傭兵のみだ。而してなほ彼等が屢ば羅馬人を苦しめ、屢ば羅馬人を惱まし、時としては其の本土に攻入り、羅馬そのものを覆滅せしめんとした。然も羅馬人は凡有る物を敵に奪はれてもたゞ羅馬精神を堅持した。而して毫も屈せず、遂に最後の勝利を得た。即ち羅馬、カルタゴの第一期戦は耶穌紀元前二六五年より二四一年に至る約二十四年の長期に亘り、第二期戦争は同じく二一八年より二一一年に至る七年間であり、前後通計三十一年間の必生必死の戦争を繼續してゐた。更に此の際特記すべきは其の間に於けるカルタゴの名將ハンニバルの羅馬侵入である。此の一擧は實に羅馬をして危機一髪の感あらしめた。ハンニバルは紀元前二一八年其の根據地であるイスパニヤを發して羅馬征伐の途に上り、アルプスの險を越えて伊太利に侵入し、トレビヤ河畔、トラシメヌス湖畔、カンネ等にて連戦連勝、殆んど羅馬を覆滅せんとした。然も羅馬人は少しも屈せず、堅忍不拔遂に羅馬の主將スキピオをしてカルタゴ本國を襲はしめ、その爲にハンニバルは餘儀なく本國に撤退し、二〇二年スキピオとザマに會戦し、遂にハ



ンニバルは大敗を蒙り、僅かに身を以て逃れ、異境流寓の遷客となつた。凡そ敵の侵入軍の伊太利本土に駐屯したること十六年に及んだ。然もなほ羅馬人は屈せず、僅かに羅馬の城壁を嬰守してなほ敵を呑むの意氣を存し、遂に敵軍を其の本國に退かしめ、更に之を一戦に塵しにして敵將を奔らしめた。若し今日の伊太利國民が此の歴史を回想したならば、今日の危機の如きは古への羅馬共和國に比して十の一にも當るまい。我等は敢て言ふ、北アフリカの領地を失ふも可なり、シチリヤを敵に奪はるゝも可なり、乃至は伊太利半島の過半を敵に占領せらるゝも可なり、苟くも伊太利國民にして其の祖先の意氣と精神とを存せば之を回復することは掌を返すよりも易しと。我等は歴史的事實に徴し、且つ現實の事相に照して斯く斷言するに憚らない。伊太利國民の特むべきは民主國の甘たるき誘惑の言ではなく、現在の事實である。彼等若し今日無條件にアングロ・サクソン人の首枷に縛せらるゝに至らば、彼等は何の顔あつて伊太利建國の三傑に見えんとするか。將た歐羅巴及びアフリカ、アジアの三大陸に跨がつて大帝國を建造したる大なる彼等の祖先に見えんとするか。

### 三、國策上の重點主義

#### 日獨伊同盟完遂の本義

日本は徹上徹下自力に依つて立つ。伊太利の政變によつて國策の遂行に何等微動だもせぬ。元來三國同盟條約は昭和十五年九月二十七日、松岡外相の時、近衛内閣によつて發布せられたるものにして、六ヶ條より成り、其の要領は「日本は獨逸國及伊太利國の歐洲に於ける新秩序に關し指導的地位を認め且つ之を尊重し、獨逸國及伊太利國は日本の大東亞に於ける新秩序に關し指導的地位を認め且つ之を尊重する」といふことを重點として成立したるもの。茲に獨伊は歐洲に於ける新秩序の指導者たる位置と責任とを有し、我が皇國は大東亞に於ける新秩序建設に關し指導者たる位置と責任とを有すること  
が明白に規定せられてゐる。従つて歐洲の戦局が如何なる變態を來たすも、我が皇國の



東亞に於ける指導者たる責任を果すに於て何等の變化を來たすべき筈はない。但だ作戰等の方略に就ては、敵の方略如何に依つて其の新狀態に對應すべきは論を俟たざれども、然もそれは我自から我が責任を果す爲の手段にして、其の目的に於て何等變化あるべき筈はない。固より注文を附くれば獨逸、伊太利も我に望む所多かるべく、我も亦た兩國に望む所少くない。然も自國の利害は自國善く之を知る。而して銘々の最善と信ずる範圍に於て最善の努力を爲すに於ては、三國期せずして協同の目的を達成することが出来る。所謂「わけ上る麓の路は多けれど同じ高嶺の月を見るかな」で、兩國は歐洲に於ける新秩序を制定する指導者の任を果し、我は大東亞共榮圈内に於て指導者たるの責任を果し、斯の如くにして我等が期待する世界新秩序の建設は完遂せらるゝことが出来る。此を以て我等は兩國の事は兩國に一任し、我はただ専ら我自から我に向つて注文すべきである。所謂「人々自から門前の雪を掃へ、他人の屋上の霜に頼著するなかれ」とは此の事である。故に歐洲に如何なる變化ありとも、我は我が東亞に於ける職責を果すを主要の目的とし、それに向つて他念あるべきやうはない。それと同時に我が東亞に

如何なる事がありとも、我等は決して他力本願の醜態を演ずることはない。斯の如くにして始めて真正の協同一致の大作用が成就せらるゝ。斯く云へばとて我等は互に氣息相接し、有無相通じ同盟國の誼を盡すに於て決して人後に墜ちざることを斷言するに遲疑しなす。

### 戦略上の重點主義

凡そ世の中に重點主義と云ふが今日ほど重點主義の必要なることはない。城攻めざる處あり、地守らざる處あり、我等は戦局の勝利の爲めに其の眼目に向つて全力を注がねばならぬ。末梢的一勝一敗の如きは固より兵家の常、意とするに足りない。我等は今更ら茲に素人兵法を説く者ではない、但だ當局者に向つて眼前の小利や小功利に頓著せず、全局の利害より見て飽くまで用兵上の策略を實行せんことを望む。之に就ては必ずしもフリードリヒや奈翁の兵法ばかりでなく、我が信長、秀吉、信玄、謙信、家康などの軍法も大に参考とするに足るものがあらう。更に一步を進めて考ふれば、用兵上の策



略ばかりでなく、我が國策としての重點主義に就て我等は慎重に又た剴切に考慮せねばならぬ。それは何事であるか、今日の國策は戦ふに在り、戦うて必ず勝つに在り。即ち必勝の爲めには一切を犠牲として之に一切を傾注することを覺悟せねばならぬ。戦争には唯だ勝つか負けるかの二事あるのみだ。而して戦はざれば已む、苟くも戦ふに於ては必ず勝たねばならぬ。殊に相手は人道を名として人道を無視し、正義を假面として正義を蹂躪し、敵に對しては如何なる残忍、惡虐、無道の事も之を敢てするを辭せざるところのアングロ・サクソンである。之に對しては必勝以外に我等の生存すべき餘地は無  
5。

#### アングロ・サクソンの亞細亞奴隸觀

我等に向つてはアングロ・サクソンは幾多の實物教育を興へてゐる。其の主なるものは第一次世界大戰後に於けるヴェルサイユ條約である。如何に彼等が勝利の權利を濫用し、暴用し、且つ惡用したるかは、誰よりも彼等の獨逸に對する態度が分明であつた。

彼等は戦前には獨逸國民を欺き、双手を擴げて驕迎すると言ひつゝ、戦後にはドイツ國民に天文學的數字に上る償金を課すばかりでなく、石炭坑を奪ひ、鐵坑を奪ひ、甚だしきは一疋の豚、一羽の鶏さへもこれを取去るに至つた。それよりも生々しき實物教育は對伊太利である。即ち今日彼等が伊太利に向つて絶對的降伏を強要し、然らざれば斷じて假借せずとなし、直ちに政變後において伊太利重要な都市に向つて盲爆を逞しくしつゝあることは、我等に向つて如何に彼等が言行の本一致であるかを痛切に白狀してゐる。況んやアングロ・サクソンは我がアジヤを以て永久に奴隸の國と信じてゐる。彼等はアジヤを彼等の植民地と見るばかりでなく、殆んど食料と見做してゐる。東亞の諸民族は彼等より搾取せらるべき運命を天から授けられたるものと認めてゐる。従つてそれに向つて反抗したる我が皇國を、彼等が如何に憎み、怨み、嫌ひ、呪ひつゝあるかは彼等の言動に依つて明白である。即ち曾て我が國に、日米親善の使節と自から標榜し、十年内外の歲月を送りたる前東京駐劄米國大使グルーの如きは、アメリカ全國を講演巡禮し、繰返し巻返し日本人の怖るべきことを説き、之を徹底的に叩き付けざるまでは戦争の終



局を告ぐべきものではないといふことを力説してゐる。又た英國の下院議員某の如きは、近頃日本人を此の際滅絶せざれば戦争を休止せざるべしと議會に於て鬨言してゐる。

### 必勝の信念

苟くも米英の實狀を知る者は、政治家と云はず、實業家と云はず、軍人と云はず、學者と云はず、乃至宗教家と云はず、極めて少數者を除くの外は皆日本人を叩きつけねばやまぬといふ意氣込を、開戦以後でなく殆んど日露戦争以後四十年間に亘つて堅持し、之を醗酵し、之を殆んど爆發せしめんとしてゐるためを承知してゐる。而して其の爆發が即ち今回戦争の動機となつてゐる。斯る事情の下に我等は戦争しつゝあるからには、單に東亞同盟諸國の安寧幸福を維持し、彼等をアングロ・サクソンの鐵枷より自由ならしむるの責任を完うするばかりでなく、我等自から生存の爲めにも必勝は必要である。即ち日本の國家に取つては勝たざれば死す、生さんと欲すれば勝たねばならぬ。國策の大綱はただ必勝の二字に盡きてゐる。故に我等が重點主義は即ち前にも申す通り我が一億

國民を擧げて一切を必勝の爲めに犠牲とすることである。之が即ち國策上に於ける重點主義の根本である。而して必勝はただ必勝の信念より來たる。



## 四、便乘主義の横行

### 犠牲的精神の不足

かつて議會のある委員会において、東條首相は歐洲よりシベリヤ鐵道を経、滿洲を経由して歸朝したる者の言を引いて曰く、滿洲に來れば天國の如く日本に入れば極樂の如しと。しかして首相もまたこの言を贊同的に援いてわが國力の餘裕綽々たるゆゑんを示してゐる。われ等は果して日本全國が極樂であるか、そのいはゆる極樂なるものは單にある一部に偏在してゐるものであるか、今これを語る自由を持たぬ。然も大體においてわれ等は餘りに果報に過ぎてゐる。現状を公平に視察すればわれ等は必勝のために一切を犠牲としつゝあるといふことを斷言することは出來ない。近く例を擧げて見んに必勝のためには食物が第一である。日本において食物といへば先づ五穀である。米でなければ

ば麥である、然らざれば豆である。次にあらゆる雜穀及び蔬菜の類である。然るにその穀物を無造作に潰しつゝある酒類の製造に向つて制限を加へざるは何故であるか。固より税は加重してゐるに相違ない。然し税の加重は決して酒類のみに限つたものではない。徳川時代においても年の實らざる時には造酒を節減し、もしくは禁制したる例は少くない。然るに今日必生必死の戦争をなしつゝある時に際し、穀類を空しく消費する酒類の製造に向つてその手を加へざるは何故であるか。

### 煙草か穀類か

更にわれ等が一言せねばならぬことは煙草である。煙草が必要品であるか贅澤品であるかは今更議論をする必要はない。人により場合によつて或は必需品といひ得るかも知れない。然も日本人が喫煙を始めたのは慶長以後である。慶長以後三百年の間における我が國人の若干数はこれを喫し來り、今なほ喫しつゝあるが、慶長以前のわれ等の祖先は未だかつて煙草の味を知つた者はない。萬事意の如くなれりと思つた御堂關白道長は



へも喫煙の味は知らなかつた。然も二千六、七百年間のわれ等の祖先は煙草なくして生活することを得たるに、今日の國民が煙草なくして生存することを得ずといふことは、如何にいひくるめんとするも決して通るべき筋のものではない。殊に煙草の生産地は比較的氣候も良くかつ地味も好き地を選ばねばならぬ。薩摩の國分、相州の秦野、水戸の太田、そのほか煙草生産地は決して五穀の生ずる能はざる瘠土ではない。煙草生産地であれば小麥、大麥、陸稻もしくはその他の穀類は必ず生産し得べきものである。然るにわが國の當局は何故にこの生産地を一變して穀類の生産地としないか。相變らず專賣局を設け、相變らず新種の煙草を製造してゐるのは餘りに非常識といはねばならぬ。記者はいはゆる世間の禁酒禁煙論者ではない。然もすべてのことを犠牲として必勝せねばならぬ場合において、最も容易に犠牲とすることの出来るこの酒及び煙草の製造もしくは消費に向つて手を加へざるは何故であるか。われ等は今こゝに禁酒禁煙を振鬨するものではない、然もわが國民にして眞に非常時を自省するの赤心あらば、せめて盃を毀ち管を折らざるまでも、大詔奉戴日たる毎月八日の一日くらゐは禁酒禁煙してもまた可ならず

やと思ふ。記者は今こゝにこの論を提出するのではない、ただ非常時といひつゝ餘りすべてのことを平常通りに押通しつゝある實例としてこれを擧ぐるに過ぎない。これが果して東條首相の極樂たるゆゑであるか、かゝる極樂が永續する間にわれ等は果して必勝を獲得し得べきか。われ等は朝野上下を擧げてよく熟圖するの必要を感ずる。

### 耽溺と關取引

またこゝに擧ぐるも癪に障る實例がある。記者の友人が最近たまたまある山高く水清き地の旅館に一夜を過ごした。然るにその旅館では貴族豪富の子弟と思はれる青年輩が、酒に酔ひつゝ米國流の音楽に打興じ、殆ど夜を徹して男女抱擁舞踏の楽しみに耽溺し、眠る能はざらしめたといふ。恐らくはかくの如きことはこの一ホテルに止まらぬであらう。到る處人目の遠き土地にはかゝる國家非常時を無視する模擬ヤンキー輩が常に山神水靈を冒瀆しつゝあることは少くあるまいと思ふ。然もこれは決して彼等青年子弟のみを咎むべきものではない、進んでその父兄たるべき者に向つてわれ等は責任を問は



ねばならぬ。彼等自身は今何事をなすか。凡そ今日において最も流行するは便乗主義である。滅私奉公などと口上にて旨く述べつゝ、公益を看板として私利を営みつゝある者、何れのところにかこれ無からんやだ。或者は曰く、軍部を相手とすれば金が儲からぬから商賣人は儲かるるところに向つて商賣をする。然もその商賣たるや所謂の横に資料を流すところの闇取引であつて、かゝる徒輩が横行する間に増産などの目的を達せんとするは決して容易のことではない。されば今日において増産を妨げるものは何物であるかといへば、われ等は何よりもこれを彼等ユダ的資本家もしくは財閥に歸さねばならぬ。われ等は立入つてこれを攻撃せんとするものではない。いはゆるわれ等は許すもつて直となす者を悪む。然も今日は非常時である。非常時においてはすべての者が一切を犠牲として必勝に向つて突進せねばならぬ。然るにかくの如く便乗主義を逞しくする者あるに至つては、果してその目的を達し得べきか否か。

## 五、常時乎、非常時乎

### 官界一部の陋習

廣く世上を見廻すに朝野を擧げて繁文縟禮が依然として流行しつつある。相變らず法規とか前例とか手續きとか職務権限とかいふことに拘泥して、徒らに机上の議論に重要な日數を空費し、口繁くして業擧がらず、論多くして事成らず、全く國家を平常通りに心得て今日の如何なる場合たるかを忘却しつゝあるは誠に遺憾千萬と云はねばならぬ。曾て英國の新聞にて讀んだことがある。印度の某停車場で虎が出た。然るに驛長は本局に向つて電報を打つた、曰く只今停車場に虎が出た、如何に處分すべきやと。今日の所謂の國家の職務に任ずる大小の人々中に、此の印度の驛長たる者果して皆無と保證し得るものあるか。更に我等が遺憾とするは職官汚吏と奸商貪賈との結託に關する風聞



である。斯ることは固よりあるまじきことであり、又た我等も然らんことを祈つてゐる。然も世間では往々其の評判があり、又た時としては其の全貌ではないが、其の爪牙鱗甲が世間に裁判沙汰として暴露するものもある。如何なる場合でも除外例はあると云へばそれまでのことであるが、今日は除外例其の物が餘りに多くして、除外例が却て普通であり、普通が却て除外例ではないかと思はるゝものもないではない。

### 精神力と物質的充實

なほ我等は一言する必要がある。世間では我の精神を以て彼の物質に敵すといふが、我等は決してそれに異存を言ふべき理由を持たぬ。固より然りである。されど我等はアツツ島に於て、またソロモン群島に於て、敵は我等に向つて如何に科學が物を云ひつゝあるかといふことを宣示してゐる。凡そ學問の最も大切なるものは敵より學ぶに如くものはない。敵に學んで敵を破るが即ち戰爭の要諦である。敵は超短波を利用して遠距離より相手の運動を知ることが出来る。敵は赤外線を利用して如何なる濃霧の中にもよく對

手の行動を視察することが出来る。敵は機械工業を利用して直ちに飛行場を造り、直ちに自動車道路を作ることが出来る。敵の科學的造詣は決して侮るべきものではない。されば必勝の算なるものは我の精神を以て彼の物質と戦ふことではない。即ち彼の物質に對しては我の物質を以てし、更に之に加ふるに我の精神力を以てせねばならぬ。こゝに必勝の要諦がある。我等は盜を見て繩を縛ふと云ふが、それも決して遅くはない。盜は今日に限つたものではない、明日も來たる、明後日も來たる。されば我等は如何なる場合に於ても其の物質的充實と科學的研究に於て敵に一步も後れを取らぬ覺悟が必要である。其の爲めには所謂従來の割據主義を打破し、蝸牛角上の小競合を撤廢し、才を選び、能を擧げ、賢に任じ、而して後始めて其の目的を達することが出来る。斯の如くにして必勝の算始めて立つものと云はねばならぬ。

### 思想戰の鐵壁を築け

今日敵の我を攻むるもの、或は昨年四月十八日の如く航空母艦よりするものあり、或



は支那大陸若しくは其の沿岸に基地を持つてそれよりせんとするものあり、或は太平洋を島傳ひに我に來り迫らんとするものもある。或は北方より現に北千島方面に來たりたるが如き徑路を取つて我を襲はんとするものもある。敵の我に對する道は少くない。然るも上記よりも更に我等が警戒すべきは敵の宣傳戰である。孫子も用間術を以て敵に對する最も有効の手段と云うてゐる。即ち此の手段に依つて敵は第一回世界大戰に於て既に獨逸に向つて其の目的を逞しうし、今日に於て我が同盟國伊太利に向つて更に其の目的を逞しうせんとし、漸く伊太利國民の自覺によつて之を其の甚だしきに至らざる以前に切止めた。今や彼等は其の全力を傾けて我に之を用ひんとしつゝある。我等は今日に於て敵の術策に乗つてはならぬ。第一回世界大戰に於てフランスが既に崩壊せんとするに際し、クレマンソー一度び出で來つて凡有る敗北主義者、和平論者、妥協論者、敵に好意を表する論者は遠慮會釋なく之を國家の逆賊として國法に處し、然る後始めて其の陣營を建直し、遂にフォッシユの兵略と相俟つて最後の勝利を博した。我が國には固よりクレマンソーの出づる必要もない。我が國には日月天に麗る如く國體の尊嚴は儼乎とし

て億兆の仰ぐところとなつてゐる。故に我等は此の機會に於て自省、自反、所謂る米英の殘滓なるものを拂拭し去つて、思想的に億兆を打つて一丸とする我が鐵壁の陣を固めねばならぬ。

### 皇民一億皆英雄

世間では日本に指導者なしと云ふ。然り日本にはムツソリーニ氏もなくヒットラー氏もない。又た今日信長も無ければ秀吉もない。西郷もなければ大久保もない。木戸もなければ岩倉もない。乃至は伊藤もなければ山縣もない。然も我等の仰ぐものは區々彼等ではない。我等は常に我が大元帥陛下を現身神として仰ぎ奉つてゐる。我等一億臣民はただ大元帥陛下の大命に獎順して一切を犠牲として勇往邁進せねばならぬ。我等の向ふべき道は既に昭和十六年十二月八日の宣戰の大詔に赫々として天日の如く明白である。苟くも之に獎順して勇往邁進する時には、世界何者か我に敵するものあらんや。況んや所謂る利己主義を以て骨髓となし、物慾を以て理想とするアングロ・サクソンの徒



輩に於てをやだ。本文の記者は曾て曰く「説くを休めよ英雄不世出、皇民一億みな英雄」と。我等もし眞に必勝の信念を持ち、而して必勝の爲めに一切を犠牲とするの覺悟あらば、必勝は必らず我等の手中に歸せむ。(昭和十八年八月十九日) 完

本文を世上に公布して未だ幾ならず、バドリオ政権は遂ひに我等の希望を裏切り、同盟國を故らに欺きたる一切の馬脚を暴露し、無條件降伏を世界に發表した。然もヒットラー總統の電光石火の措置は其の宜しきを得、ムツソリーニ總帥を九死一生の裡より救ひ出だし、遂ひにファシスト黨は此に蘇生し、ムツソリーニ總帥に依つて新たに伊太利社會共和國は創造せられた。今後の成行きに就ては、時局の發展に俟たねばならぬが、我等は既に殆んど失墜し去りたる伊太利の名譽と面目とが、再びムツソリーニ總帥に依つて回復せられんことを祈つて止まない。(昭和十八年十一月廿九日)

敵國解剖篇



## アングロ・サクソンの正體

### (第一) 米英崇拜の陋習

「幽靈の正體見たり枯れ尾花」。我等がアングロ・サクソンに對する氣持は、先づ此の通りである。アングロ・サクソンは、凡そ百年幾く我が國民の總てとは云はぬが、大多數を擧げ、貧富、貴賤、智愚、賢不肖の差別無く、崇拜の標的となつてゐた。アングロ・サクソンを撃滅する前提は、先づ我が國內より、此のアングロ・サクソン崇拜の陋習を一掃せねばならぬ。これを一掃するには、先づ各人、各個の心中に深く根ざしたるアングロ・サクソン優越觀を拂拭せねばならぬ。

x x x  
先づ米國より語らんに、米人が我等に對して友誼的態度を取つたにせよ、若しくは敵



對的態度を取つたにせよ、昭和十六年十二月八日大詔渙發までは、我が國民の過半は米國に向つて好意を表してゐた。而して米國も亦た我に向つて好意を表す可きものと認定してゐた。若し我等に誤解がありとしたならば、其の誤解は總て善意的の誤解であつた。即ちベルリは我を威嚇し、已むを得ずんば大砲の力もて我を強要し、且つ我が近海の小笠原島、若しくは臺灣等に、貯炭場や海軍の根據地を設け、我を攻撃し。又た進んで我が臥榻の傍に、植民地さへも設けんと計畫した。そのベルリさへも、開國の恩人として、態々久里濱にはベルリ上陸記念の大石碑さへも建立し、其の文面には、我が明治元勳の第一の政治家伊藤博文公の筆になる銘辭を彫刻してあるではない乎。

醫者と云へばドクトル・ヘボン。學者と云へばフルベッキ先生。理想的人物と云へばワシントン、リンカーン。賢人と云へばフランクリン。日本人が米國及び米國人を崇拜するの習慣は、明治の新知識森有禮—金之丞—より最近ジャズに現を抜かす銀座ボーイに至るまで、皆自然らざるは無かつた。

x

x

x

米人は當初我が國に向つて頗る不平であつた。それは彼等は日本より生糸とか、茶とか、日本の主要物産を、どしどし輸入しつつあるに拘らず、日本は米國よりは何等目覺ましく購買するものは無い。此の如き片貿易は、日本が米國に對して申譯無いではないか。現に米國公使ハツバートの如きは、陸奥宗光伯が米國公使として出發する送別會の席上、斯く演説した程であつた。

然るに日本側では、成程日本は米國へは多く賣つて少く買ふが、英國へは少く賣つて多く買つてゐる。しかして米國は又た英國へ多く賣つて少く買つてゐるから、日英米三國の貿易を通算すれば、米國は日本に失ふところを英國より得、日本は英國に失ふところを米國より得てゐるといつても差支無いではないかと、餘計な申譯をしてゐた程であつた。

## (第二) 米國の壓迫と日本の反撥

然るに形勢一變し、凡有る日本に必要な物資は、殆ど總て米國に依存する事となり、



これが爲めに米國は其の物資さへ押へれば、日本は否應無しに米國の思ふ儘になると考へたのも、米國流儀の物質萬能國に於ては、更に異しむに足らない。事實その通りで、米國より棉を押へられ、石油を押へられ、屑鐵さへも押へられ、通商條約は破棄せられ、資金は凍結せられるといふことになつては、日本が困つたことは、當然のことであつて、困つたといふ點に於ては、米國側の豫想通りであつた。但だ困つたから平身低頭するといふ結論だけが間違つてゐた。日本は困つたから反撥した。困つたから驟然と起つた。困つたから遂に自衛の爲めに宣戰の大詔は渙發せられた。

### (第三) アメリカカ屋の看板

如何に日本がアングロ・サクソンの文明に心酔したかは、今日から思へば、とても信ぜられない程である。後日文部大臣として日本主義教育の先登者であつた森有禮子の如きも、明治の初期には、日本の文詞は非文法的で、とても完全に正確なる意義を陳ぶる

ことは出来ぬと云ひ。其の爲めに「日本教育論」の一書を英文で著作した。然るに馬場辰猪氏は、これに憤慨して、故らに「日本文法論」を作つて、日本には立派な文法がある、又た日本文にて如何なる事でも言明せられぬものは無いといふことを、明かにした。然るに意外であつたのは、馬場氏の「日本文法論」が、これ又た英語で著作せられたことである。本文の記者は明治十五年の夏、馬場氏に面會し、馬場氏より親しく其の小冊子を贈られたことを記憶してゐる。

併し森子同様の感は、明治初期以後の知識階級中にも抱いてゐた者鮮くなかつた。明治十八九年より二十四五年までは、日本に於ける歐化熱は其の極度に達した。歐化熱と云つても、所謂英米化熱であつて、重要な文書などは、先づ英文で草稿し、これを改めて日本文に翻譯してゐた。記者は屢々、それを目撃し且つ屢々、諸先輩より其の事を聴いた。而して其の實例の一として擧ぐ可きは、明治三十三年政友會が伊藤公に依つて創立せらるるや、其の綱領は朝比奈泉氏が筆したといふことであるが、其の第二の綱領とも云ふ可き、府縣會議員選舉に際し、伊藤公の黨員に告げたる文書は、都筑馨六男を



して、先づ英文にて起草せしめ、本文の記者に向つて其の翻譯を依託せられたことがあ  
る。斯る次第で、日本文輕蔑と云はん乎、或は英語尊重と云はん乎、何れにもせよ、こ  
れ程までに英語を重要視してゐた。

斯る状態であるから、昔の漢學者が品川まで出掛けて、支那に一足接近したと云つて  
喜んだといふ話と同様、何は兎もあれ、英米でさへあれば、猫も杓子も、これを驕迎し  
たるは、寧ろ當然と云はねばならぬ。

かくて米國が我に向つて惡意を示したることさへも、我は悉くこれを好意に諒解し、  
例へば日本移民の學童に差別待遇を與へて、これを排斥したるが如き。又た我が移民に  
對して其の入國を拒むばかりでなく、既に入國したる移民に向つて、凡有る苛烈にして  
不公平なる法律を設け、これを追立てないばかりに虐遇したるが如き。これ等のことさ  
へも日本人中これを憤慨した者も鮮く無いが、又た支那人は日本人以上に、米國人より  
虐遇せられてゐると云ひ、或は又た日本人が斯く虐遇せらるるは、餘りに日本的である

爲めに、自から招くの禍であると云ひ、米國人でさへもこれを口にするを恥とする  
ことをも、平氣で考へるは勿論、又た平氣で口にする者も鮮く無かつた。

さればハリマンが日露戦争の殆んど重なる、唯一の効果とも云ふ可き南滿鐵道を請負  
はんと提議するや、内外の時務に精通すると稱せられたる元老は勿論、當時の首相桂公  
さへも、うっかりこれに乗り、漸く小村外相がポーツマスより歸京の後、これを九分九  
厘のところまで切止めることを得た。

如何に日本の朝野が米國に向つて、彼より別段求められもせぬのに、其の好意を傾け  
たかは、如上に依つても知ることが出来る。斯る次第であれば、米國が大艦隊を艦装し  
て我を威嚇す可くやつて來たに際して、我は珍客として之を驕迎した。所謂「臆拳笑  
面を打たず」で、流石のルーズヴェルトも「今日のルーズヴェルトに非ず—これにて振  
上げたる拳のやり場に困却したのは、寧ろ却つて痛快と云つても差支あるまい。

即ち一般的に日米交渉の歴史に照らしても、一方から見れば、如何に我が國が兩國間



の平和を保持するに忠實且つ熱心であつたかを證明するに餘り有る資料であるが、他方から見れば、日本が米國に向つて夢中となつて、己が好意を表すると同様に、彼も我に好意を表するものと、大早計にも臆断したることの芽出度さも、亦た限り無しと云はねばならぬ。

會て或る晚餐會の席上、予は佛國大使クロードル氏と椅子を隣りにした。語次クロードル氏は、

貴下は何と思はるるや。今や貴國は其の善風美俗を擧げて之を抛ち去り、殆ど米國化しつゝあるではない乎。

と、如何にも苦々しき氣分にて予に告げた。クロードル氏の云ふ事は、恐らく趣味の問題で、銀座街頭に溢れたる惡趣味などが、特に彼を刺戟したものと察せらるるが、一臆を排して觀察すれば、日本の米國化は、寧ろ日本精神の遺失と、享樂主義の蔓延であつた。即ち殆ど日本の或る階級の如きは、アメリカ屋の看板を掲げざる者無き程であつ

た。

#### (第四) 日本は果して東洋の英國なる乎

日本を東洋の英國と誰が呼び出したか知らぬが、我等の少壯時代には、それが通り文句であり、又た其の時代の一部の人々は、日本を是非東洋の英國たらしむ可く、且は羨望し、且は奮進し、且は努力した。即ちそれ程までに英國は日本にとつて、一個の理想國であつた。標準國であつた。

若し日本と英國との類似點を擧げんには、第一、兩國とも島國である。然も其の主島も面積に於て大差無く、且つ共に大陸と相接してゐる。且つ英國もアングロ・サクソンを根幹とする混合人種であり、日本も大和民族を中樞としての混合人種であると云ひ得られないこともない。けれ共類似の點はこれに止まる。即ち地理に於ても、島は島でも、日本は蜻蜒洲と云ふ通り、細長く、西南より東北に延びてゐる。英國は東西南北、自ら平衡を得てゐる。而して日本は九州に於て、即ち朝鮮半島と、平戸、壹岐、對馬の飛石



を隔てて、相接してゐるが、本島そのものは、渺茫たる日本海を隔てて、曾て支那に於ては化外の地と云ふ可き滿洲方面と遙かに相接してゐる。而して南支那とは、琉球、臺灣を隔てて相接してゐるが、これ又た容易に大兵を送る可き便宜は少い。然るに英國は大陸とドーヴァー海峡の一衣帯水を隔てて相接し、然も一望平野であつて、英國の中心地帯と云ふ可きロンドンは、海岸を距る遠からず、和蘭海軍の如きは、英國に攻め入り、其の艦隊がテムズ河を溯つてロンドンに肉薄したる程であつた。日本では大陸と直接に相摩擦するは、九州か然らざれば東北の一角で、日本本島の要部は、容易に外敵の來り侵し得る位地では無い。

#### (第五) 人種融合に關する日英の相違

更に人種に就て云へば、日本は昔から皇別、神別、蕃別の區別はあつたが、今日に至つては總ての日本人は皆同一模型より打出したるが如く、生物學的に、科學的に、又た精神的に、心靈的に融合し、九州の者も、東北の者も、苟くも大八洲に住する者は、皆

な唯一なる日本國民である。

然るに英國では等しく英國と稱するも、スコットランドは民情、風俗、習慣、宗教までも特色を維持し。眇たる本島の一角を占めるウエルスの如きは、其の人種もケルト人にして、言葉さへもウエルスの言葉が尙も通用してゐる。ロイド・ジョージの如きも、自らウエルス人たることを誇りとする程である。アイルランド海峡を隔てたるアイルランドに至つては、極めて少數なる新教徒、及び英本國より移住したる不在地主を除けば、人種は概してケルト人であり、宗教は勿論、其の思想の上にも、全く獨立し。今日に於ては國號さへもエールと改め、英國では強ひてこれを大英聯邦の一に置かんとするも、彼等はこれを屑しとせず、即ち英國が獨逸、伊太利、日本と開戦中にも拘らず、尙ほ中立を標榜して、全然没交渉の立場を占めてゐる。アイルランドの英國に於ける位置は、九州の日本に於ける位置以上である。然るに尙ほ此の如きを見れば、等しく混合人種と云ふも、英國は單だ異りたる人種を同一、若しくは接近の地に居住せしめてゐるといふに過ぎない。然もアイルランド人の如きは、十中の八九まで、英國に向つて敵意



を挟んでゐる。

斯かる状態を以て、日本を東洋の英國などと呼ぶに至つては、實に以ての外のお世辭にして、有難迷惑も致に至つて極まる。それを自ら東洋の英國などと呼び、英國ならんことを希望するが如きは、今日から見れば、全く本氣の沙汰では無い。

#### (第六) 皇室中心と議會中心

更に日英の相違の最も大なるものを語らんに、英國は徹頭徹尾議會中心國であり、日本は徹頭徹尾皇室中心國である。英國の政治は下より押上げたる政治であり、日本の政治は皇室中心の政治である。英國の君主は有史以來今日のアメリカの如く、正式の公選制度では無かつたが、若干の豪族、會長、其の他有力者の相談に依つて選舉し、若しくは其の承諾同意を得たものであつた。

而して英國の歴史は、對外關係に於ては、外國より征服せられ、若しくは大陸の或る領土を征服せんと試みて失敗したる歴史にして、對内的には國王と人民との權力爭奪の

歴史であつた。其の人民と云ふも、當初は大地主たる貴族であり、それがやがては中地主、小地主に及び、一轉して商業の成功者たる大資本家及び中流階級に及び、最後には一般勞務者に及んだものと云ふ。

其の人民と君主との權力爭奪の結果、遂に一切の政權は擧げて、これを議院に歸するに至つた。議院といふが、これを詳しく云へば、上院では無く、下院である。貴族院では無く、庶民院である。英國の歴史がこれを語る如く、英國の議會は、國王の方から見れば、租稅徵集の機關であつた。英國では國家を全く一個の商事株式會社と認め、人民が其の株主であり、國王が其の會社の社長であり、社長は株主の利益を保護し、若しくは増進する爲めに設けられたものであるといふ觀念が、其の基調を爲してゐる。斯くて一錢一厘たりとも、株主たる人民の承諾を得なければ、徵集することが出来ぬといふのが、其の原則となつてゐる。即ち代表無ければ納稅無しといふのが、英國の立國以來の不文律にして、米國獨立も、總てとは云はぬが、最も多く此の原則から割出されて來てゐる。



此の如く英國の議會は、其の主張の爲めに、屢々國王と衝突をした。それで國王は成可く經費を節減し、成可く仕事をせず、成可く議會を召集せぬことを心掛けてゐたが、思ふ様に參らず、餘儀無く新税を徵集し、若しくは一度廢したる舊税を回復するの必要に迫られ、止むを得ず議會を召集することとなり、其の度毎に議會は漸次其の權力を擴大し來つた。

偶々この原則を國王が無視すれば、人民は國王を敵として争亂を起した。それが即ち英國第一次の革命となり、その結果、チャールズ一世は斷頭臺上の露と消え失せた。國王を殺すことさへも議會は敢てするからには——この議會は固よりクロムウエルの兵士（アイロン・サイド）の威迫によりたりとはいひながら——王を廢立するが如きは、株主總會で社長を改廢すると全く同一にして、何等造作もかからぬのであつた。

第二革命にゼームス二世を追放し、更らに和蘭からオレンヂ王ウィリアム及び其の皇后メリーを迎へたるを見ても、これを知ることが出来る。かつて英國の憲法學者ダイシ

ーは、英國議院の無制限的大自在力を讃へ、「如何なるものでも英國の議院ではなし得ざるものは無い。ただ議會の議決を以てしても、男性を女性に變じ、女性を男性に變じることが出来ないのみだ」といつたが、正しくその通りである。

従つて英國の議會では、政體變更なども、一の議員の動議に依つて提出せらるることには、決して不可能では無い。即ちヴィクトリア女皇の寧ろ中期以後に屬する頃にさへも、サー・チャールズ・ディルクの如きは、共和政治を英國に移入するの動議を提出した程であつた。ディルクその人の如きも、總てはその詭激なる議論を緘黙したが、然も彼は第二グラッドストーン内閣の時には外務次官として、相當の勢力を揮つた。而して彼を次官とするに就ては、女皇がグラッドストーンに向つて苦情をいつたのも、強ち無理とは思へない。

此の如く議會中心主義が英國を支配し、今日でもなほその通りである。ポールドウインがエドワード八世に向つて、その不自然なる關係を結びたるシンブソン夫人と關係を



絶つ乎、王位を擲つ乎、二者その一を選べと迫りたるも、畢竟彼れポールドゥインが與黨として議會の多數を背後に擁したが爲めである。その事の實行に當りたるは、ポールドゥインであるが、それを實行せしめたるは、議會であるといつても差支あるまい。

上の如く記し來れば、わが國において議會中心主義などを唱ふべき筈は無く、苟くもこれを唱ふる者は、正しく亂臣賊子の類たるを免れないことは明白である。然るに自ら尊皇愛國の徒をもつて任ずる人々が、平然として議會中心主義を唱道して、世間もまたこれを容認して怪しまなかつたのは、畢竟日本を東洋の英國と認め、また英國たらしめんとしたる情力の效すところといはねばならぬ。

要するに日本よりアングロ・サクソン崇拜の陋習を一掃するには、先づ日本と英國とはその立國の根本精神において、絶對的に兩立すべきものに非ざることを諒解するを第一義とせねばならぬ。

### (第七) アングロ・サクソンの品定め

抑々アングロ・サクソンの正體とは何者である。

白色の巨大なる體軀、残忍さうな碧眼、赭味がかつた金髪、健啖で始終空腹を感じ、強い酒で元氣附けられてゐる胃の腑、晝夜ぶつ通しに飲むことを少しも恥としない。と史家は語つてゐる。

併しこれは唯だ皮相だけのアングロ・サクソンで、此の蠻氣多く、動物性逞しきアングロ・サクソンを打割つて見れば、さう簡単に片附けられぬ性格を有つてゐる。頓馬であるかと思れば、極めて機敏であり、安樂を好むかと思れば、極めて活動し、金錢を浪費することに長じてゐるかと思れば、金儲けの術もなか／＼上手い。宗教心も濃やかである様だが、それでゐて海賊根性は骨の髄まで透つてゐる。動物を愛して、犬や馬も可愛がるが、それと同時に人の見ぬ處では、如何なる大虐殺も平氣でやる。



世界を巡遊したる者は、日本語以外に知識無き者でも、アングロ・サクソン人の姿勢堂々として、他の民族を壓倒するが如き風采を認識することには、吝かであるまい。彼等自ら優越性をもつて誇りとするばかりで無く、他の人種、他の民族をして、好むにせよ、好まざるにせよ、彼等の優越性を認めざるを得ざらしむる腕前や氣前を有つてゐる。即ちフランス人などは自ら世界文化の最高峰に立つ文化人として誇りつつも、「アングロ・サクソンの優越性」と題する書籍さへも、彼等の或者の手によつて編纂せられてゐる程だ。

しかして彼等は世界をところ狭しとして大手を振つて厚顔濶歩してゐる。固より彼等は恐らくは世界を擧げての總スカンであらう。然も英人にしても、またその新店たる米人にしても、ジュウを除けば、金費ひが荒くある。またアングロ・サクソンといひつつ、その皮を被りたる本來のジュウも少くない。所謂「とかく浮世は金次第、金がいはずる旦那かな」で、彼等は世界の有りとあらゆる避寒場、避暑場、湯治場、享樂場をわが物顔に振舞つてゐる。

固より古店の英人は聊か落着いたる風があり、新店の米人は成金風を臆面も無く出してゐるが、彼等の優越感は「ローマに入ればローマに従へ」といふ諺を逆用し、如何なる場所へも自分の流儀をそのまま持込んで行く。しかして相手が喜ばうが喜ぶまいが、それを押賣りして行く。それは畢竟世界はわが物であるといふ意識が、彼等に存在してゐるからである。

今こゝに少しくアングロ・サクソンの正體を語るに就て、彼等に對する品定めの一、二を語るであらう。イギリスの生んだ大詩人バイロンは曰く、  
凡そ天地の間に、英吉利人ほどのやな奴は無い。予は彼等と接近するを好まない。出來ることなら遠方から彼等を憎悪してゐたい。地獄を除けば、予が彼等と同居を欲する場所は皆無だ。

と。英吉利人の嘘つきは、昔から評判であつたと思はるゝ。エラスムスは曰く、  
事苟くも眞偽の問題に就ては、英國は一般的に惡評を有つてゐる。



と。エラスムスは和蘭人であり、歐洲に於ける碩學にして、オックスフォード大學は彼の講學の地であつた。彼は決して英人に惡意を有つ者では無かつた。然も其の宣告は上の通りである。

又たフレデリック大王は曰く、

英吉利政治の第一義は、其の同盟國より總てのものを求め、同盟國に向つて、總てのものを與へない事である。

と。日英同盟締結の當時に於て、我國の政治家が此言を知りたらんには、今少しく警戒するところがあつたかも知れぬ。

ヱイクトリア朝の上半期に於ける、有名なる外務大臣パーマーストンは鬨言して曰く、

英國には恒久の敵も無ければ、恒久の味方も無い。唯だ恒久の利益あるのみだ。

と。即ち苟くも利益の有るところは敵とも握手し、味方をも裏切る。これが英國の建て

前である。現に今日英米及びソ聯の關係を見れば、思ひ半ばに過ぐるものがあらう。

x

x

x

米國獨立檄文の調印者の一人にして、避雷針の發明者であるフランクリンは曰く、凡そ如何なる國民でも、英國の屈辱せられることを冀はぬものはあるまい。

と。フランクリンの十二徳は、彼の人生に對する教訓である。其の十二徳の宣示者であるフランクリンが、英國の屈辱を希ふなどは、其の人柄に不相應なる言葉である。然もこれ程迄に英人は世界の人から嫌はれてゐた事が判る。ゲーテは曰く、

何れを眺めても、英國ほど偽善者及び正人らしく勿體振る者の多い所はあるまい。何れの國家と雖も、英國ほど徹底的に我利我執に依つて支配せられたる國は無く、何れの人民でも、英國ほど恐らくは其の政治的及び個人的關係に於て、最も非人道なる人民はあるまい。

と。ゲーテは決して詭言激言する文士ではない。彼は實に宇宙を腦裡に包蔵する最も完備したる頭腦を持つ哲人である。彼をして斯く言はしむるは、決して偶然ではあるまい。英吉利人の偽善は、實に堂に上り、室に入りたるものである。所謂る彼等のセントルマンとは偽善の稱號で、彼等は國內に於ては——然も人の見る所に於ては——鹿爪らしく、勿



體らしく、慇懃恭敬に振舞つてゐるが、一度國外に出づれば、旅の恥はかき捨てて、如何なることをも無遠慮にしてのける。所謂る海賊の本性は期せずして自然に暴露し來たる。

x

x

x

ハイドンは曰く、  
佛蘭西では處女は純潔であるが、主婦は言語道斷である。和蘭では處女は言語道斷であるが、主婦としては純潔を保つてゐる。英吉利に於ては、處女も主婦も常に言語道斷である。

と。これは恐らくは酷評かも知れない。然も我等は此の如き評言あることをも記憶せねばならぬ。更に米國獨立檄文の起草者たる、トーマス・ヂェファアソンの言を援かんに、凡そ英國の政府程不道徳にして傲慢無禮に、虚榮心と野心とが強く、制海權の専有を望み、腐敗混濁の中に没入し、我等米人に向つて抜く可からざる嫌忌を有つ者は無い。我等は近世英國の歴史に於て、又は英國政府の主義、及び其の實行の辯護者中に於て、

自由若しくは政治的の意義に就て、教訓を求めんとするの無用なるを知る。商人國の主義は金錢であつて、道義で無い。然のみならず、英國がその商業と腐敗とを以て世に名高くなつて以來、現在に至るまで未だ會て歐洲諸國民中自國の同盟國に對して、より多く信義を缺くものはない。

假りに今チェファアソンを地下より作して現状を見せしめば、自國の狀態は如何。英國の狀態は如何。自國と英國との同盟の狀態は如何。我等はこれを一讀して、恰も今日の英米の現状及び兩國の關係を豫言したものかの如く思ふ。我等はこの機會において、現大統領ルーズヴェルトが、開國歴史の創造者の一人たるヂェファアソンの言を反復熟圖せんことを勸告する。

x

x

x

カントは曰く、

凡そ國家として、他の諸國と比較し、英國民ほど嫌忌す可き、殘虐にして傲慢に、且つ戰爭好きの國民はあるまい。



と。ルーテルは英人を指して曰く、

君等の國に狼が居ないことは間違ひも無きことだ。けれ共君等自身が即ち狼である。と。恐らくはルーテルの吐いたる言葉の中で、これ程の名言はあるまい。更にルツソーは曰く、

英人は彼等自身、彼等の人道的精神、其の人民の親切心を稱讃する。彼等が望む通りにこれを大聲疾呼せしめよ。けれども誰一人としてこれに反應する者はあるまい。

と。最後に我等は北米合衆國の始祖ジョージ・ワシントンの言を引用するであらう。ワシントンは其の敵將たる英軍の司令官に向つて曰く、

我が兵士の君等の手にあるものは、實に人道に於て堪へ難き仕方を以て待遇されてゐる。若し其の地方の人が慈善的に寄與せざるに於ては、彼等の多くは、飢餓の爲めに死せねばならなかつた。然も甚しきは我が兵士を君等の兵士の中に加へて、更にこれを我に向つて使用することである。

と。今日アングロ・サクソン人が如何なる待遇を、我が在米、在印度、在濠洲、其他彼

等の威勢の及ぶ範圍に於て加へつつある乎。ワシントンをしてこれを見せしめば、これを何と云ふであらう。米人は其の始祖に對して恥づるところは無き乎。將た英人は百餘年を隔てて尙ほ舊時の暴惡を改めざるのみか、更にこれを加重しつつあるではない乎。

### (第八) 一貫したる海賊根性

或時予は皇國海軍に於ける、海軍歴史及び海軍戰術の權威たる某中將との談話の際、  
それでは英國は尙ほ腐つても鯛であらう。

と云つたところ、某提督は色を起して、

否、否、決して腐つてはゐない。

と予の説を辯駁した。

而して政治向きに就ては、全く英國が立憲政治の本家本元で、縱令法文の上に於て悉



く彼を模範としなかつたとしても、其の思想、精神に於て、全くこれを模範として來た。即ち世界の富の元締は大英銀行にある如く、憲政の元締も亦た英國議會にありと考へてゐた。これは日本人ばかりでなく、世界の多數も亦た同様に一程度こそ相違あつたにせよ一買被つてゐたに相違あるまい。これは買被つた者の不見識は勿論であるが、凡そ世の中にアングロ・サクソンほど宣傳のうまいものは無い。彼等は確かに馬糞を饅頭と思はしめ、肥桶を温泉と思はしむるだけの腕前を持つてゐる民族である。

日本人も、若し一度英國の歴史を通讀したならば、早速此の買被りを願ひ下げたであらう。英國の歴史は我國の歴史と其の年代に於ては大差は無い。但だ我等の歴史は萬世一系、天壤無窮の皇室を戴き、神代より今日に至る迄、大河の流るるが如く、混々、滔々として、世が進むに従ひ、其の河流も亦た愈々廣大となりつつある。

然るに英國の歴史は何等一貫したるものは無い。若し一貫したるものがありとすれば、それは唯だ海賊根性のみであらう。概していへば、英國の歴史はこれを三分するこ

とが出来た。最初の歴史は英國が他民族より征服せられたる歴史である。ローマ時代には最初にケールズによつて征服せられ、次にはクロヂアスによつて征服せられた。このローマから征服せられた印象は、現代まで深刻に残つてゐる。チヌスタートンは斯くい

つてゐる。  
佛蘭西や英吉利において、最も重要なことは、佛蘭西や英吉利が、ローマの遺物を保存するといふことでは無い。即ち佛蘭西も英吉利も遺物を保存するところではなく、彼等自身が即ちローマの遺物である。

斯く彼は英國史の劈頭において語つてゐる。

然しローマばかりが英國の征服者では無い。やがてはいはゆるアングロ・サクソン人が侵入した。次にはデーン人がやつて來た。最後にはノルマン人がやつて來た。ノルマン人の襲來は、上期の英國史における一の分水嶺にして、英國史上にはそれが即ちノルマン・コンクエストとして知られてゐる。ノルマン人は本來英國を征服したるデーン人



の一派であつて、彼等は同根より生じたものであるが、ノルマン人は佛蘭西に侵入し、佛蘭西のノルマンディーに根據を定め、一百年の間に殆んど佛蘭西人化した。彼等が英國を征服して以來、英國は全く佛蘭西化し、其の言語も、文學も、文章も悉く佛文を用ゐることとなつた。而して新征服者たるウィリアムは、英國に於ては、英國々王であり、佛國に於ては、佛國々王に從屬するノルマン公であつた。

斯くて英國と佛國との關係は相結ばれ、爾後英佛間の葛藤は絶え間無く相續き、漸く佛國少女ジャン・ダークが、英國の勢力を大陸より驅逐し、此に於て英國は元の島國に還つた。

されば英國が世界的大帝國となつたのは、畢竟ジャン・ダークの賜物であると云つても差支あるまい。何故ならば英國が大陸から手を引いて、其の冒險的氣分の遺漸無く、遂ひに世界の各所に出掛けて、其の新領土を獲得するに至つたからである。

第二期は専ら内訌であつて、國王、貴族、庶民の間に争が行はれ、また同時に宗教上

の葛藤がそれに結びつき、殆ど内訌で暮した。しかして第三期に至つて、始めて英國は漸く遅ればせに世界の邊隅に手を伸ばすに至つたのである。即ち第一期においては世界の各所を、凡有る罪惡、凡有る方便を用ひて、ことごとく征服し得らるる限りは征服して、以て廿世紀の今日に至つた。かくて人口においては世界の三分の一、土地においては四分の一を支配する大帝國を打建てた。若し英國に肇國の大精神といふ可きものがあつたならば、それは海賊的精神である。英國は今日までも私掠免狀なるものを所持して、いざ戦争となれば、忽ち海賊的行爲を公の免狀となし、大びらに國民に行はしめてゐる。凡そ海洋の自由なる言葉とは、正反對である。第一次世界大戰の時において、ウィルソンが海洋の自由なる問題を提起して英國を困らしたのは、これが爲めである。

#### (第九) 買収で終始せる英國憲政

英國の憲政は徹頭徹尾買収によつて成り立つてゐる。英國立憲政治家として、英國史上に空前絶後の手腕を揮つたるウォールポールは「各人皆その代價を有つてゐる」とい



つた。即ち彼は人間を正札付きの代物として、金さへ出せば如何様にもなると思つてゐたのである。いはゆる「袂の選挙區」といふ言葉は、英國の貴族たる大地主が、選挙區を己が氣儘に操縦することを意味するものである。後には自由黨の泰斗となつたグラッドストーンの如きも、その當初はニュー・キャッスル公爵の「袂選挙區」から當選したものである。選挙法改正とは、一方に於ては選挙權の擴張であり、他方に於ては腐敗選挙取締りであつたが、如何なる手段方法を以てしても、唯だ買収の實が巧妙となるまで、決して日本人が遠方から眺めて、理想選挙などといふものが、英國に行はれてゐる心配は無い。

英國の選挙で新機軸を出したのは、デヨセフ・チエンバーレンで、コーカスの法を用ひ、自黨の各選挙區の投票を、都合よく調節、按配し、其の爲めに選挙人の數相應と云はんよりも、寧ろ不相應に多數の代議士を出すことが出来ることとなつた。

されどそれ等の事を行ふには、黨費が最も必要であるから、政黨の勝敗は多くの黨費を得る者が、勝利を得た。扱て其の黨費は如何にして得る乎と云へば、其處にユダヤ人

の手が大いに動き、又たユダヤ人以外でも、種々の腐敗策が行はれた。

其中で最も著明なる方法は賣爵の運動である。曾てバジョットは、英國の爵位制度を目して、

これは國民の拜金熱を調節する一の方法だ。

と云つたが、豈圖らんや爵位そのものが却つて拜金熱を挑發する手段となつた。即ち政權を獲得したる黨派の幹部は、目ぼしきものを見出し、これに向つて爵位を賣却することである。準男爵、男爵、子爵、伯爵、甚だしきは其上にも及んだ。其の内幕は曾て英國の「國民評論」誌上にこれを素つ破抜いたことがあるが、チヌスタートンの英國史には、其事が特筆せられてゐる。

苟くも英國政黨の世界第一次大戰以後の歴史を知る者は、如何に英國政黨の腐敗が甚だしき乎に驚き、憲政の標本とは果して此の如き淺間敷きものかと慨嘆するであらう。ロイド・ジョージの内閣が大戰後瓦解したことには、幾多の理由があるが、其一に數ふ



可きは、其の内閣が賣りたる賣爵の金を、首相たるロイド・ジョージの手に歸する乎、將た彼を支持したる多數黨たる保守黨の手に歸する乎、其の分配の問題を計上することを忘れてはならぬ。又た曾て第十九世紀の中半以來赫々の光を放ちたる自由黨が、第一次世界大戰以後如何にして没落したるかを考ふれば、其の最も重なる理由の一は、賣爵に依つて得たるところの黨費を、ロイド・ジョージの手中に留め置く乎、將たそれを黨幹部の間に公開する乎といふ問題であり、アスキス派の黨員は、これは黨そのものの所有す可きものであると云ひ。ロイド・ジョージはこれは自己に屬す可きものであると云ひ、縱令黨に屬せしめても、其の分配、使用は、悉くロイド・ジョージ其人を本位として割出す可きものと云ひ。其の確執よりして、遂に自由黨の領袖等は、相互に反目し、没落し去つたのである。恰もこれ博徒の仲間が、テラ錢の分配を争つて、仲間喧嘩をすると同様であつて、鼻持ちならぬ話である。若し此の以外に腐敗の材料を數へんとすれば、數限りも無し。

#### (第十) 物質萬能を脱却せよ

此の如き物質萬能の英國人、米國人にして、いかでか日本の實力を知ることが出來よう。曾て我國に久しく在留し、我國の文法を講じ、我國の古典たる「古事記」「萬葉集」の權威として知られたる教授チエンバーレンは、日本を去つて後、「日本の新宗教」と題して、

維新の元老は忠君愛國の新宗教を製造した。

といふ小冊子を刊行した。維新そのものが忠君愛國心の爲めに出来たりたるものにして、維新の元勳が忠君愛國を製造したものでないことは、苟くも日本人ならば誰も判る事である。然るに彼は如何なる眼を以て我が大伴氏の歌や、防人の歌を讀んだであらう乎。彼が如きは、目に盲せずして、心に盲したものと云はねばならぬ。

英米人が當初より日本を侮り、日本を與みし易しとしたのは、畢竟彼等が物質萬能の效すところで、驚くに足らぬが、アングロ・サクソンの物質萬能に陶醉して、日本の前



途に餘計なる心配を抱くものあらば、彼も亦た身は日本人にして、心はアングロ・サクソン人であると云はねばならぬ。我等は此の如き者が、一人たりとも日本に存するなからんことを祈るのみである。(昭和十八年三月十三日)(完)

## アングロ・サクソンの宣傳術及び思想戦

### 無形戦争

最近我國にては防空演習など頗る真剣に行はれ、何時米英の飛行機が飛んで来ても、これを撃退するの準備が日に月に完備しつつある。これは誠に結構のことであるが、同時に我等は亦た敵の宣傳及び思想戦に對して、同様の警戒を必須とする。殊に防空に就ては、昭和十七年四月十八日米國飛行機の到来以來、偶然にも我等に實物教育を與へたが、宣傳及び思想の方面に於ける敵側の策動は、具體的に我が一億同胞を警戒せしむべきものがない。そのものの無いところに、却つて重大なる危険が含まれてゐる。

### ノースクリフの誇言



既に一昔のこと、第一次世界大戦後、英國の新聞王ノースクリフが世界巡遊の途次、日本に立ち寄るや、後藤新平伯はこれを内田山の邸—即今滿洲國大使館—に迎へ、茶會を開いた。予も招かれてその席に列し、ノースクリフと若干の談話を交換した。彼は予に語つて曰く「御身らは如何に宣傳がこの大戦に重要な働きを爲したかを知つてゐる乎。この大戦の勝利の鍵は宣傳にあり。その詳かなるを知らんと欲せば、試みにクリュー館の歴史一冊を讀め」と。クリュー館とはいふまでもなくロンドンに於ける英國宣傳本部である。その書は當時予も既に購求して一讀してゐた。然もノースクリフが世界大戦に於ける聯合國側の勝利はロイド・ジョージにもあらず、フォッシユ元帥にもあらず、宣傳部の元帥たる乃公であるといはんばかりの氣色を示したことにより、予は再び思ひ直して彼書を一讀した。ノースクリフの言は固より割引きを要するが、たとひ割引きしても、宣傳が如何に敵側を壊崩せしむるに有力であつた乎は、肯定せざるを得ない。

#### 一大宣傳屋ルーズヴェルト

今日の英國の宣傳機關は、全くノースクリフの遺物である。その次第は曾て第二次世界大戦の以前に、英國に於けるジドニー・ロヂャーソンの手に成る「大戦に於ける宣傳」(プロバガンダ・イン・ザ・ネクスト・ウォー)に於てよく説明してゐる。米國に於ての宣傳は、第一次世界大戦時代に於ける大統領ウイルソンその人が一大宣傳屋であつて、若し彼に採る可き技能ありとすれば、宣傳にあつた。而して今日の大統領ルーズヴェルトが一大宣傳屋であることは、ウイルソンその人に更らに金覆輪を掛けてゐる。然もその惡辣にして老獪なるに至つては、百人のウイルソンを集めても、彼には敵はぬ程の腕前がある。現に論より證據、今回ルーズヴェルトが議會に提出したる、本年七月一日よりの來年度に於ける豫算書に徴しても明白である。この豫算書は、一方に於ては自國一億五千萬の人民を敗戦の失望より救ひ出だし、彼等をして將來に多大の希望を持たしめ、所謂る取らぬ狸の皮算用に夢中たらしめ、敵側に向つては米國の人的資源、物的資源、凡有る資源が滾々として大河の水の如く限りなく、懸ては敵側をしてその中に沈没せしむるに至るの疑懼を抱かしめんとする秘策がその中に潜んでゐる。彼等は一言を吐



くにも決して宣傳を忘れない。宣傳は實に英米政治家の十八番である。我が當局者は、米國が宣傳の費用として一億ドルを計上し、二千五百名の局員を使用し、ソ聯、イラン、その他に多數の情報官を派遣し、ロンドン、ダブリンに支局を設け、國內主要都市四十個所に地方支局を開設し、努力しつつあることを示し、我が國民に警告したが、これは米國としては當然過ぎる程當然のことである。

#### 宣傳の旨味を嘗めた英米

一度人肉を口にしたる虎は、人を見れば忽ち飛び附くといふが、アングロ・サクソン人たる英米二國は、第一次世界大戦に於て十二分に宣傳の旨味を嘗めた。世界第一次戦争に於て嘗めたる彼等が、いかに第二次の戦争に於てこれを忘却すべき。彼等が如何にその方面に努力したるかは、試みに最近廿五年間東亞に於ける彼等の活動を見れば能く判る。即ち彼等の悪策陰謀が宣傳となつて、如何に凡有る方面に妖雲怪霧を捲き起した乎、それは回想するに慄然たるものがある。我等は今こゝにその事を詳しく語る自由

を持たぬ。しかし第一次の戦争に於ける彼等の遺口については、極めて少量ながらこれをこゝに語るであらう。

#### 英國宣傳本部の暗躍

一九一八年、我が大正七年、世界戦争は足掛け五年となつた。所謂龍疲れ虎困しむ。敵も味方も歐洲を中斷したる斬壕に對據して、何日戦争が終るべき見込も無かつた。この時に於て所謂クリュー館の活動は出で來つた。英國ではかねて宣傳によつて新聞王となりたるノースクリフを宣傳本部の元帥となし、凡有る老巧新鋭の人々を網羅して活動を開始した。殊に彼等の成功はよく相手側の心理状態を洞察し、その弱點を見抜き、その強所を避け、巧みに目標に到達するの道を見出したことである。當時文士としては縦横自在、天馬空を往くの筆を有し、何人にも愛讀せられ、何人にも諒解せられたるウエルズの如きあり、また少壯時代をタイムス通信員としてベルリンに送り、中年時代をまたウイーンに送り、更らにローマに轉じ、やがてはロンドン・タイムスの外交部長と



して、歐洲全國の情報を手にする元締となりたるステイードの如きがその高級參謀となり、所謂る眼快手利、痒きところに手の届くやうなる宣傳をして、先づオーストリア、ハンガリーをドイツより離反せしめ、やがてはドイツ國內の人心を攪亂し、遂ひにドイツは敵を四境の外に防ぎつつ、却つて自國の眞中に敵の装置したる毒瓦斯が破裂して、内自から潰ゆるに至つたのである。想うてこゝに到れば、ノースクリフが宣傳の効果を誇り、凡有る武勳や文勳に比して、それに凌駕したりとするも、未だ必らずしも悉く誇大妄想狂の言とは云はれまい。

### 狐狸同盟

英米兩國は同じアングロ・サクソンの分派と云ふが、銘々の個性がある。例へば英國の首相チャーチルは、臆面もなく英國の大東亞開戦以來の失敗を暴露し、これまでは定石通り英國が戦争初期の敗軍であつた。然しこれからは形勢が好轉し、やがては定石通り最後の一戦に於て勝利を得るといふ氣前を、自國民にも、中立國民にも、併せて敵國民

にも示してゐる。その圖太き根性は、或は敵ながらも買つて良いとも云うてよからう、これに反しルーゾヴェルトは、宛も少婦が七月腹を抱へて、それを長き袖に覆はんと試みるが如く自國の敗戦を隠して、隠し切れない場合、漸く人の噂も七十五日になつた後に、小出しにこれを示してゐる。即今一昨年に於ける眞珠灣海戦の敗報を公けにするなどとは、迅速機敏を第一義とする米國の流儀としては不思議千萬だが、其實は不思議でない。これで米國の輿論が如何にルーゾヴェルトの眼に甘く見られてゐるかが判る。要するに血は水より濃しといふが、英米の同盟は實をいへば狐と狸の同盟で、双方何れも化し合つてゐる。正直のところ米國はこの機會に於て、分家の番頭が本家の困難に乗じて遺産を相續せんとするが如く、また本家の番頭はこの危急を救ふに精一杯で、何でも分家の番頭の申す通りに委せても、さりとていざとなれば最後には我が思ふ通りの事をやる量見であらう。狸も人を化すには妙を得てゐるが、狐には一籌を譲らねばならぬ。如何に老狐たるチャーチルが圖太き乎は、佛國の興廢存亡の期に臨み、それでは英國と合併して同一政府の下に佛國を置いては如何などといふ、飛んでもない相談を持ちかけ



たことを見ても判る。然しいづれにしても人を化すといふ點に於ては、狐も狸も同様である。我等は決して油断をしてはならぬ。

#### 戦時に於ける虚偽

彼等アングロ・サクソンは、虚偽を以て本質としてゐるばかりでなく、その虚偽には時としては象箴もし、時としては鍍金もし、極めて念に念が入り、千變萬化、容易にその尻尾を捉ふることは出来ない。曾て英國のボンソンビーの「戦時に於ける虚偽」(フオールスフッド・イン・ウォー・アタイム)と題する一書がある。彼は英國宮廷に縁故淺からざる名門の出にして、彼自身も賢宰相の名あるキャメル・バンナーマンの秘書官となり、自由党内閣では外務次官となり、労働党内閣に於てはランカシャー州公領尙書として國務大臣の地位に在つた。されば彼の著作は正しく信憑するに足るだけのものがある。此の「戦時」といふことは第一次世界戦争に關する戦時であつて、この書は一九二八年に出版せられ、一九四〇年には八版を経てゐる。今まこの書を見れば、虚偽の例はドイツ、

フランス、合衆國、イタリアの側にも多いが、最も多數の虚偽は悉く英國で製造せられたものである。然もその虚偽の作者が殆んど堂々たる英國の大政治家、若しくはその仲間であることは實に痛快に堪へないものがある。著者は自己の黨派たると、他の黨派たるとを問はず、事實に根據して書いたものであるから、そこにこの書の面白味がある。予は第一次世界大戦の歴史家が、必らずこの小冊子を見逃すなからんことを勸告して置く。

#### 徹底せるデマ宣傳

さて斯の如き虚偽に固めたる中にて、今ま一、二を摘出すれば、例へばドイツの兵隊が、佛國の赤ん坊に對し、他日彼等が佛國の兵隊としてドイツに抗敵するなからんことを欲し、聞くに堪へない殘虐のことをしたといふことがある。又たドイツでは脂肪に窮したる爲め、屍體から脂肪を供給したといふことがある、其他抱腹絶倒すべき話があるかと思へば、誠にやかな話もある。然もその誠にやかな話が嘘である。彼等の其手は現に今日でも行はれてゐるではない乎。日本程俘虜を優遇し、時としては餘りに優遇する



ではないかと思はるる國は世界に無い。然るに彼等は日本が俘虜を虐待したといふ風評を世界に觸れ廻つた。それを打消したのは日本ではない、俘虜彼等自身である。彼等は日本の彼等に對する態度の公正にして理解あることを認識し、これを本國に申し送つて如上の浮説譏誣を一掃し去つた。彼等は又た日本軍が武装無き土地に爆彈を投じ、無辜の人民を虐殺したといふが、これも眞赤な嘘である。彼等自身は、我が堂々と其の旗幟を掲げたる病院船に向つて爆彈を投じたり、若しくは國民學校の校庭に於て遊戯しつつある兒童に向つて機銃掃射を行つたりして、敢て顧みないではない乎。斯る目前の例を擧げ來るも、如何に彼等が虚偽を逞しくするかを知るに餘りあるであらう。

### 九十九敗一勝

ただ彼等の虚偽の中で見通すべからざることは、英國は百戰九十九敗するも、最後の戦には必らず勝つといひ、米國は無盡藏の人と富とを持つて世界を敵とするもびくともせぬといふが、これ等のことは皆な事實に全く反することである。英國が何時も出足

のろくして相手が漸く倦み疲るゝ頃に起き上ることは、宛も朝早く起きたる者が午睡を思ふ時分に、朝寢の男がそろ／＼起き上つて、朝飯時分の氣分で立向ふやうなもので、のろまが本領の英人に取つては短所でもあるが、一面より見れば長所でもあるといへよう。それを巧く利用し、九十九敗一勝の格言を拵へ、これを以て外は敵國を脅かし、内は自國の民心を安んじてゐるが、然しこれは眞赤な嘘である。勿論永き英國の歴史には斯かる例も皆無ではない。然しこれに反する例もまた澤山ある。

### 被征服者英國

凡そ世界の歴史に於て英國程他より征服せられたることの多い國は稀である。ローマ時代でさへも英國は二回征服せられてゐる。また英國の歴史に於て分水嶺ともいふべきノルマン征服は、英國の史乗ばかりでなく、歐洲中世史に於ての最も顯著なる事實の一つである。また英國は最後には必らず勝つといふことをいつてゐるが、それは英國人一人の定めたる原則で、事實は決してさうではない。若し英國が最後に勝つといふことが原則



とすれば、何故に北米合衆國は出て來つたのである乎。七ヶ年に亘る北米叛民及び佛國の援軍と英軍との戦争は、當初は英國側が好首尾であつたが、次第に形勢が逆轉して、遂に英將は叛軍に降を乞はなければならぬことになつたではない乎。また重なる出來事として、ナポレオンが遂に英國を征服し能はなかつたといふことを最大の誇りとしてゐるが、それは必らずしも英國人の腕前ではない。英國人の誇るよりも寧ろナポレオンの爲めに嘆くべきことであつた。成程英國はナポレオンに對しその海權を保持してゐた。されば英國は海權を保持しつつも、ナポレオンの封鎖政策に對しては一指をも加ふる能はなかつた。現に軍國の宰相として最も英國の歴史に輝きたる小ピットは、アウステリッツの會戦に於て墮露兩國の聯合軍がナポレオンの爲めに惨敗を喫したるを聞くや、萬事休するの心地を爲し、傍人に向つてその室の壁に掲げたる歐洲地圖を指して曰く、「之を卷き去れ、今後十年間はこの地圖に必要はない」と。かくて彼はこれが爲め幾もなく氣死し去つた。予は六十年前、グリーンの英民史に於てこの一項を讀み、殊に著者の史筆の秀拔なることを今更猶ほ記憶してゐる。然るにナポレオンのモスコー遠征は端なくも英國を

して復活再生せしめた。更らに極めて近き例を擧ぐれば、ドイツの連日連夜のロンドン空襲には、最早英國人も神經衰弱となり、今更一週間も續けば如何なる變動を來すやも知るべからざる危機に瀕した。然るにドイツがその力を東部に専らにすべく、それを中止した爲めに漸く英國人も一息つくを得た。かくの如く露國は間接に二度までも英國を最後の敗北より救うた。また英國人は他の強國に對してばかりでなく、眇然たる南阿のポア人に對してさへ、マジユバ丘の敗北に屈辱の平和を結んだではない乎。かゝる例を擧げ來れば澤山ある。我等は決して英國人が最後の戦に勝つたことが無いとは云はぬ。然し悉く最後の戦に勝つたとは尙更ら云はない。何となれば事實がこれを認めないからだ。

### 自から欺く米國

米國の資源無盡藏は全く一種の夢である。如何に彼等が今日ゴムに窮してゐる乎、如何に彼等が錫に窮してゐる乎。彼等は石油も無盡藏であり、鐵も無盡藏であり、その他戦争に必要なものは皆な無盡藏であるといふが、その石油さへも南洋方面の石油は悉く日



本に押へられ、その鐵鑛の如きもまた然りではない乎。「人を呪はゞ穴二つ」といふが、彼等は日本人より凡有る物資を奪ひ去るべく、自國のみならず南洋諸島にさへ手を伸ばして封鎖したが、その極却つて彼等は逆手を喰つてゐるではない乎。人的資源の如きはその海員及び將校が、相踵いで洋底の藻屑となり、これを補充する爲めには一日や二日の訓練をもつて出で来るものではなく、目下頗るこれに窮迫してゐるではない乎。彼等は造船の技術と資料とを誇つて、無盡藏に新艦船を製造し得べしといふも、これもまた不可能のことである。のみならず彼等が喪失する艦船の數は、製造する艦に比すれば更らに多大なる事實に徴すれば、ルーズヴェルトの大言壯語は、管だに敵を欺くばかりでなく、また自から欺くものといはねばならぬ。

### 米英宣傳術の綱領

必らずしも悉くとは云はぬ、されど概言すれば東亞現今の禍亂は皆なアングロ・サクソンの宣傳が其の禍因である。彼等の宣傳術は千變萬化であるが、其の綱領は極めて簡

單である。

第一 自己の勢力を誇大に宣揚し、相手の勢力を微少に貶殺すること。

第二 對手國と對手國との間を離間中傷して、互ひに喧嘩せしむること。

第三 對手國の國內に向つて、思想及び感情の摩擦を挑發すること。

第四 所謂る文化的征服の美名を以て、自國の第五列を對手國に製造すること。

以上の綱領に據つて、最近五十年間の英米の東亞に於ける宣傳を逐一吟味し來れば、思ひ半ばに過ぐるものがあらう。彼等は日本を以て露國の力を東亞に牽制せしめた。之に依つて英國は印度の安全を得た。彼等は日本の力に依つてドイツを青島より退却せしめた。之に依つて英國は東亞に於てドイツの脅威より免れた。やがては日本が擡頭して英國自身の競争者とならんとするを認め、抜く手を見せず日英同盟を切つて米國の軍門に降つた。之が英國である。米國も亦た日本を飛石として支那に臨まんとしたが、日本が米國の飛石たるだけの役目を以て満足せず、自から雄飛せんとするを見て、直ちに英國と力を協せ、東亞に於て日本を叩きつけることとした。



## 我國に對する宣傳

その叩きつける方策は二面ある。一面は日本の興國であり、またあらねばならぬ中國を日本に叛かせ、所謂る背日の空氣を中國に煽揚したることだ。かれ蔣介石は實に英米の笛に踊り、歌に舞うたる者である。第二の方策は日本に向つて平和論、自由論、軍備縮小論等凡有る思想を注入し、日本人をして無我夢中に英米人の第五列たることを甘んずるに至らしめんとしたことである。今日でこそかかる話は隔世の感をなしてゐるが、大正より昭和の初期にかけての日本を見よ。天皇機關説は、青天白日の下、最高學府に於ける憲法論の基礎となつてゐたではない乎。議會中心説は我が帝國議會に於て殆んど多數者の有意無意に信奉したるところではなかつた乎。その他所謂る敗北思想、妥協思想、英米追隨思想なるものは、悉く皆な英米の文化とともに我國に注入されたものである。日本は本來世界無比の國體をもつて立つ國柄である。その國柄にして何故に國體明徴の必要を感じしむるに至つた乎。この一事を以て見ても、如何に彼等の宣傳術が日

本に廣く深く滲透したかが判る。

## 伊國抱込みの實例

之は決して本文記者の邪推でもなければ見當違ひでもない。彼等の第一次世界大戦に於ける行動は、よく上記の事情を説明し、また證明して餘りがある。彼等はドイツに對抗する爲めに、その關係の漸く阻隔せんとしつつあつたイタリアに手を伸ばした。イタリアは開戦當時中立を宣言した。然るに手を代へ品を代へイタリアを誘惑した。而してイタリアの豫て希望するアドリア海の向岸に於ける某地點を約束するのみならず、イタリアに向つてそれ以上の領土及び群島の割讓さへも約束した。所謂るイタリアに取つては望外である。こゝに於てマキャベリ以來國際政局に處するには油斷も隙もないイタリアが、英國側の甘言に乗り、一九一五年五月、英側に立つてドイツに向つて宣戦を公布した。然るにいざヅエルサイユ會議の席に至れば、その約束は雲や霞と消え去つて、遂ひにイタリア首席代表者オルランドは、五巨頭會議の會場から席を蹴立てて去るの已む



なきに至つた。話元に戻つて、やがて彼等はドイツと最も濃厚の關係あるオーストリアを喰かして單獨講和を結ばしめた。而して最後にドイツに向つてその手を揮うた。

### ドイツ國民を瞞着

彼等は第三者に對してはドイツを總括的にハンスと呼び、箸にも棒にも掛らぬ野蠻人と嘲つた。然るに彼等がドイツその者に對する手段は、實に巧妙を極めてゐる。彼等は先づドイツ國民とカイゼル及びドイツ軍閥とを別々に取扱うた。彼等は曰く「我等の敵はカイゼル及び軍閥である。ドイツ國民は我等に於て何等敵とするものではない。然もドイツ國民にして飽くまで軍閥の奴隸となるに於ては、我等は軍事ばかりでなく、金融、生産、その他凡有る方面に於てドイツを壓迫し、その息の根を止めねばやまない。けれども若しドイツ國民が我々自由國民の仲間に来り投ずるに於ては、我等はこれを驩迎するを辭しない。我等の目的はドイツ國民を壓迫するのではない。その他の國民に對しても亦た然り。ただ總ての世界國民に向つて、公明正大なる保障の下に自決の自由を保障

せんとするに外ならない。然も今回の戦争には征服も無ければ割譲も無い。所謂不増不減の原則をもつて臨むものにして、最後の目的は世界的な大平和の建立に外ならない」と。口は實に重寶なものである。ドイツ國民はそれに瞞着せられたのである。而して一度ビグエルサイエ會議に臨めば、彼等は天文的計數以上の償金を課せられ、國土は割譲せられ、物資は掠奪せられ、牛も馬も豚も鶏も殆んど奪ひ去られた。されば今回の戦争開始に於ても英國は再びこの手を試み、我等の敵はヒットラーである。ナチス黨である。ドイツ國民には何等の悪意を持たぬなどと囂言したが、佛の顔も三度である。ドイツ人も今回はかかる宣傳に乗らざるばかりでなく、愈もつてヒットラー總統に全幅の信望を捧げ、如何にヒットラー總統とドイツ國民とを離間せんとするも、彼等は實に同心一體となり、英米諸國の宣傳屋も、遂にその手段を試みる餘地なきに至つたのである。

### 照 顧 脚 下

我等は決して過去のことを彼れ是れいふではない。我等の關心は、現今及び將來に在



り。然も我等が過去を顧みるは、ただ現今及び將來の戒めとせんが爲めである。今や英米の手は全くとはいはぬが、軍事上に於ては殆んど封じられてゐる。ビルマ・ルートも絶たれてゐる。支那大陸に於ける航空基地も破摧せられてゐる。ソロモン群島、アリユンシャン諸島は争地となつてゐるが、これとても彼等の到底手を伸ばすべき餘地は無い。然も彼等が前年ドイツに加へたる經濟包圍戰なるものは、最早空中樓閣に歸してゐる。今日の日本は東亞共榮圈の繩張りが既に定まり、その繩張り内に於て自給自足して不足を告げざるばかりでなく、我が與國にもこれを支給するに憚らないだけの安全なる位置を占めてゐる。最早一滴の石油でも、一片の鋼鐵でも英米に向つて求むるところはない。さすれば彼等が若し日本に向つてその力を逞しくせんとせば、宣傳戰及び思想戰が最も彼等にとつて適當なる武器といはねばならぬ。この戰略及び戰術に於ては、彼等が最も熟練したるところにして、我等が最も不熟練のところである。彼等がこの方面に向つて從來も注ぎつゝあつた努力を、更らに今後從來に倍して注ぎ來る可きは、苟くも常識ある者ならば直ちにこれを前知することが出来る。

### 國內思想の統一

本文の記者の語らんとするところはなほ多い。然も今日に於てはこれ以上を語れば、却つて敵に乗ずべき機會を與へるかも知れない。故に姑く沈黙を守ることとする。然も我等は第一ドイツ、イタリアは固より、我が東亞共榮圈内の滿洲國、中華民國、タイ國、佛印、その他我が占略したる各地方の原住民及び居留人の如何を問はず、これを打つて一丸となし、如何なる場合でも彼等に乗せしむる機會を與へざることを努めねばならぬ。更らにそれより大切なるは、我が國內の思想上の統一である。もし萬一我が國內に於て敗北思想や、妥協思想や、英米の所謂自由思想が痕跡だにも止むるに於ては、敵は必ずそれを導火として我が國內を攪亂するに至らん。これ實に敵を導き我が本陣に斬り入らしむるものである。叛逆罪といへばこれ以上の叛逆罪はあるまい。我等は宜しく一億の民衆を一大鐵壁として、以てこれに當ることを覺悟せねばならぬ。(昭和十八年一月十三日)



世界史上の一大悲劇



## 世界史上の一大悲劇

### (第二) 徹底せる海賊主義の因果

若し現代の「一大悲劇」といふものあらば、それは大英帝國の自から崩潰しつゝある事相であらう。今日戦争の多事多端に取紛れ、世界の人は敵味方に論無く、此の大なる悲劇が眼前に展開せられつゝあるに氣附く者さへ殆んど無い。それは恰も徳川幕府の末期に於て、日本國民の八九割迄が、幕府が既に其魂を喪ひ、藻抜けの殻となりつゝある當時さへも、尙ほこれを三代將軍家光、若しくは八代將軍吉宗の幕府と同一視したる者あるの類だ。勝海舟は曾て、

かけとめぬ千びきの碇綱をなみたゞよふ波の行方知らずも

と詠つた。今日世界大帝國の首相たる看板を背負つてゐるチャーチルに、果してこれだ



けの覺悟あるや否や。

古はローマの大將スキピオ・大アフリカヌスは、カルタゴを征服し、其の都城に火が罹りて、曾て地中海の南岸に榮華を極めたる大都府が、焦土となりつゝある光景を眺めて、坐るにホーマーのトロイ亡滅の詩句を想起して、慨嘆したといふ。未だ知らず此の現代的カルタゴたる英國の爲めに、一掬の涙を揮ふ者が何處に在る乎。英國が産出したる一大劇作家シエクスピアをして今日に在らしむるも、亦た恐らくは筆を投じて、其力の及ばざるを嘆くであらう。

x

x

x

大英帝國と云へば、今日が今日まで、世界第一の富國であり、強國であり、同時に又た文化國でもある。然も此國は、國としての壽命は二千年に垂んとするも、大英帝國としての壽命は、漸く其の四分の一、四五百年の間に止まる。之を具體的に云へば、先づエリザベス女王以後のことである。「英國膨脹史」の著者シーレーは曰く、

エリザベス女王の晩年に於て、英國は歐洲以外に未だ全く領地を有たなかつた。大英

帝國は存在しなかつた。スコットランドは別個の帝國であり、アイルランドに於ける英國の勢力は、僅かに異種の人民の間に於ける小植民地に止まつてゐた。と。此の如く大英帝國の發展は、極めて近代的のものである。

然るにポルトガルよりも、スペインよりも、オランダよりも、フランスよりも遅ればせに出で來りたる英國が、如何にして彼が如き大帝國を作り上げ、英國女王ヴィクトリアの領地には、太陽の没することが無いと云ふ迄に發展した乎と云へば、云ふ迄も無くそれは全く海賊的行動が圖に當つたのである。其の一例を云へば、クロムウェル時代の英國は、所謂極端なる新教國として立ち、自由民権の本義に依つて、其の革命を成就せしめたものである。然るに當時のクーパーは左の如きことを云つてゐる。

オランダは海岸に於ても、又た新世界に於ても、商業上我國の一大競争者である。縱令彼が新教徒的勢力でありと雖も、彼を亡滅せねばならぬ。即ち舊教徒國の援助を借りても、彼を亡滅せねばならぬ。

斯かる魂膽で、全く暴力で相手の競争者を叩き付けたのである。



即ち英國の戦争は、簡單なる争覇的戦争では無い。其の裏面には、商業上の損得が必らず伏在してゐる。英佛間の戦争の如きも、フランスが北米に先鞭を著けたるその後から、英國がこれを奪はんとし、將たインドに於ても同様である。要するに英國の戦争は、商賈本位の戦争で、最初から問題が勘定づくで、引合ふか、引合はないかといふ計算の上から始めたものである。即ち一時的の海賊で無く、發作的の海賊でなく、恒久的、計畫的、而して大規模の連續的、普遍的の海賊的行動である。

而して苟くも勝つ可き見込みあり、勝つて得る見込みがあれば、直ちに其手を差出して、其の相手が何者であつても頓著無く、目的を達せねば已まないのである。斯くして彼は新世界にも大帝國を築き上げたが、不幸にしてそれは獨立戦争に依つて失つた。併し其の一半はカナダとして今尚ほ存續してゐる。インドはフランス人が先鞭を著け、且つ如何にしてインドを取る乎を發明した。それは第一インドの兵隊は、到底歐洲の兵隊には敵することが出来ない。第二にはインドの兵隊を訓練すれば、其の結果インドを以

てインドを征服することが出来る。然るにイギリス人は全くこれを横取りして、これを以てインドを征服し、且つフランス人をインドより追出した。又た濠洲は從來新オランダと呼ばれたもので、オランダ人の手より奪ひ、最後に南阿は又た同様オランダ人の手より奪つた。南阿聯邦國の出で來つたのは、實に英國女王ヴィクトリアの晩年より、エドワード七世にかけての時であつた。此の如く海賊根性に徹底したる英人は、凡有る機會に其の根性を發揮し、時としては自から其の機會を作つて、遂に世界の隅々まで、恰も蠶が桑の葉を食ふが如く、食ひ盡さんとした。

## (第二) 英人による英國亡滅論

然も歡樂極つて哀情生じ、英國の下り坂は、ヴィクトリア時代よりエドワード七世時代となり、更らにジョージ五世時代に至り、急轉直下して來た。英國の衰亡に就ては、其の最盛時に於けるヴィクトリア時代に、既にこれを暗示したる者もあつた。又たこれを諷諭したる者もあつた。所謂「疲勞したるタイタン」、「老衰せる猛獅子」などい



ふ言葉は、追々英國の代名詞となつて來た。

それ程迄に英人の極めて少數なる識者中にも、行先が心細くなつて來た者もある。イギリス人にして濠洲に赴き、更らに濠洲より又た英國に還りたるチャールズ・ピアソンは、一八九三年(明治二十六年)一月、「國民的生活及び品性」なる書を著述し、白哲人種の爲めに極めて悲觀的豫想を洩らした。茲に白哲人種とあるは、専ら英米のアングロ・サクソン人種を指したものであることは、其の内容を見れば、分明である。予は此書を讀んで、ローマ帝國を三つも併せたるよりも大なる世界的大帝國が、既に自潰作用を始め來らんとする兆候を見て、坐ろに我が大東亞回復の曙光を認むるの愉快に堪へなかつた。本書は當時我が社中に依つて抄譯せられ、「白哲人種之前途」と題し出版したることあれば、明治中期の青年中には、今尙ほ記憶したる人もあらむ。

又た日本が露國に勝たたる翌一九〇六年(明治三十九年)、英國に於ては西曆二〇〇五年に、其の十年前亡んだ英國の衰亡史を、日本の國民學校用書に假托し、東京に於て刊

行せられたるものとして、英國オックスフォード、アーデン社より出版せられた「英國衰亡史」なる一書がある。其の著者は筆名ヴィヴィアン・グレイ、本名エリオット・E・ミールズといふが、兎も角此書は英人が日本國民學校教科書に假托して、以て自國の衰亡を自國民に知らせんとするの趣意に外ならなかつた。

本書に挙げたる衰亡の理由は、凡そ九ヶ條ある。(第一)都會生活が農村生活を壓し、イギリス國民の健康と信念に禍ひしたること。(第二)二十世紀のイギリス國民が、保養場としてのほかに、海を顧みないやうになつて來たこと。(第三)纖弱化と贅澤化の甚しくなつたこと。(第四)文學、演劇趣味の頹廢したること。(第五)イギリス國民の體格と健康が漸次弱まつたこと。(第六)イギリス國民間に知識的、宗教的生活の衰へたこと。(第七)租税が誅求され、市政費が濫費されたこと。(第八)教育の偽方法がイギリスに横行したこと。(第九)イギリス國民の自衛力と國防力が無力化したこと。(木村莊太氏翻譯に據る)尙ほ又た最近にも一九四〇年出版せられたる「大英帝國の衰亡史」がある。此の著者はロバート・ブリツフォールトにして、それをシンクレア・シドウキツチ氏が摘録し、



序及び評説を加へたるものにして、相當辛辣でもあれば、痛快でもある。我等は唯だ書名を擧げたるばかりにて、内容を語るの煩を避くるが、兎も角も英國の衰亡といふことは、最近五十年間、日を逐うて濃厚となり來り、一抹の哀愁が夢魔の如く、自然に大英帝國を掩ふことゝなつた。

扱て此の情勢を自覺したか、若しくは默識したか、何れにせよ、英國に於ては、英國女皇の中年以後、所謂帝國主義なるものを唱道して、輸血法を試みたるものがある。チスレリーが英國女皇にインド皇帝の帝冠を押付けたるが如きもそれである。シーレー、ローズベリー、デイルク等の議論、延いてデヨセフ・チエンバーレンの帝國主義に至つては、其の最も顯著なるものであつた。而して又文學者としての喇叭手は、實にキツプリング其人であつた。

然も此等折角の輸血法も、當人共の思つた程の效能は無かつた。寧ろ衰亡に拍車をかけたのが關の山であつた。

### (第三) 同族相喰む

第一次世界大戦は英國をして實に生死存亡の十字街頭に立たしめた。表面的に見れば、英國は此の戦争で勝ち、ドイツは敗けた。若し英國が此の勝利を善用して、自から新たなするの道を講じたならば、英國は此の機会に於て、再生復活が出來たかも知れない。然るに彼は此の勝利に狎れて、爾後の二十年を苟且儉安に暮らし、遂ひに今日の狀態に立至つた。これに反してドイツは恰もチフス患者が回復して、其の身體の組織を一新した如く、再生復活し來つた。而して英國とドイツとの關係は、二十年前の位地を、二十年後の今日に於て全く顛倒した。

英國は會て一八九六年頃、『ドイツ製造品』(メード・イン・ジャーマニー)の一書に依つて、ロンドンの街上何れの店頭も皆なドイツ製品ならざるなきの事實に目覺めて、大に舊習を一新して、能率主義に立戻る可きを論じ、ローズベリーの如きは、其の主なる一人であつた。然るにそれも其儘で、遂ひに第一次世界戦争が過ぎた。それ以來殆んど



ドイツの状態には無關心で過ぎた。それを警告した者は今日の首相チャーチル以外、極く少数者に過ぎなかつた。

今日は最早や手の著け様が無い次第となつた。然も一步を進めてこれを考ふれば、英國が今日の状態に立到りたるは、積悪の效す所と云はねばならぬ。英國は實に海賊主義を徹底した。其の榮えて、世界的大帝國を築き上げたのも、海賊主義であり、又たそれが潰崩しつゝあるのも、海賊主義である。諺に「逆につて順に守る」といふが、英國は徹頭徹尾、逆につて逆を守つた。英國は我が鼻の先のアイルランドさへも味方にすることが出来ない。況んや四億に垂んとするインド人に於てをやだ。併し歸つて考ふれば、英國の敵は日本でも無く、ドイツでも無く、イタリアでも無く、フランスでも無く、固よりソ聯でも無く、英國の敵は其の植民地であるカナダである。濠洲である。最も大なるはインドである。

併しそれ等は尙ほ忍ぶ可きが、今日に於て英國を呑まんとしつゝあり、既に半ば呑み

つゝあるは、即ち血は水よりも濃かなりといふ北米合衆國である。併し合衆國をして其の虎狼の心を英國に向つて逞しくせしむるに至つたのは、英國である。英國は所謂の自業自得、自亡自滅の境遇に向つて、毎日進軍しつゝある。若しこれを悲劇と云はずんば、人類の歴史に何物が悲劇であらう。然も其の悲劇は全く同族相喰ひの悲劇である。海賊の子が海賊の子と、互ひに獲物を争ひ、其極自他の肉を相喰ふんとするに至つては、實に悲劇の極致である。

#### (第四) 没理想の英國

我が皇國の肇國に於ける八紘爲宇の皇謨に就ては、今茲に申すも畏し。昔ギリシヤにはプラトンの理想した共和國があつて、哲人が上に立ち、民衆を指導するを理想とした。支那では堯舜禹湯、文武周公、唐虞三代を以て政治の極致と爲し、爾來幾千年、何れもそれを以て標準とした。然るに所謂の大英帝國に於ては、如何なる政治的理想ある乎。否な大英帝國と云はず、英本國そのものとして、如何なる根本義を國家として固有したる乎。



固よりトマス・モリアの「ユートピア」(一五二六年)の如きがあるも、それは當時の政府や、社會に對する諷刺にして、プラトンの受賣りを爲したる迄にて、それが英國政治の實際とは、全く没交渉であつた。

我等は英國の盛衰興廢の本末を辿るに就ても、實に英國人の没理想に驚くの外は無い。彼等は國家として何等の理想も有たない。又た何等の信念も有たない。彼等は唯だ現在を現在として受取るのみで、若し強ひて彼等に求めば、個人の便宜の爲めに國家は存在するものであるといふより外に、何等の明答を得ることは出来まい。英人は徹上徹下國家に對する宏遠なる根本的理想無く、従つて國家そのものに中心的力が無い。

x

x

x

アングロ・サクソンは本來常識的の民族である。現實的の民族である。論ありて事あるでは無く、事ありて論あり。説ありて物あるでは無く、物ありて説ある國民である。所謂英國の憲法は製造したるものでなく、成長したるものであるといふことは、現實そのものが自然に成長を遂げたる事相を云ふものである。而して現實そのものと云ふ

は、何である乎と云へば、英國史家シーレーが「英國の海將は殆んど海賊である如く、英國にとつては、戰爭は富を得る爲めの一大産業であり、最も有利的營業であり、最も儲け多き業務であり、最も有利的投資である」と云つた如く、彼等は利益以外に何を考へず、思ひもせず、動きもせず、仕事もしなかつた。

要するに海賊根性が時と場所とに依つて變化し、或時は細流となり、或時は淵となり、或時は激湍となり、或時は大瀑布となり、或時は海となるも、水たるに變化無き如く。又た或時は氷となり、或時は微温湯となり、或時は冷水となつても、等しく水である如く、唯だ海賊根性が物に應じ、形に附して、千變萬化するに過ぎない。

#### (第五) 英國の政論

斯く云へばとて、英國に政論が無いではない。寧ろ現代に於ては、英國が政論の本家本元とも云ふ可く、何れの國も大概皆な英國を其の間屋として、それより政論を移入し來りつゝあつたことは、間違ひ無きことである。予は哲學者でも無く、又た法政學者で



も無い。然も史的眼孔を以てこれを見れば、英國の政論は正しく英國そのもの、委を、理論的に説明したるものと云ふも差支あるまい。

假りにイギリスの帝國が、エリザベス時代より始まりたりと見て、其の時代に於けるベーコンの云ふところを検討せんに、彼は英國に於ける致知格物の一大哲學者にして、又た英國哲學の經驗派は、彼を始祖と仰がざる者は無い。彼は同時に又た實際政治にも關係し、ジエームス一世時代には、國璽尙書ともなり、子爵にも敍せられた。而して彼は潰職の爲めに其の名節を汚したが、然も彼が英國思想界に於ける一大祖師であることは、誰も異論の無いところだ。

彼は英國倫理學者の快樂說の本尊にして、政治上に於ては彼は徹頭徹尾功利派である。彼は曰く、

何人も運動無くして健全を保つことは出来ぬ。國家に於ても亦た然り。されば正しく榮譽ある戦争は、眞實の運動と云はねばならぬ。

と。彼は戦争の是認者である。而して彼は、

國家は海陸共に強くあらねばならぬ。海の主人となることは、即ち王國の集約である。と云ひ、

君主は其の隣國が、或は領域を擴張し、或は商業其他に於て富國となることに就て、警戒を怠つてはならぬ。外交政策の眞義は、權力の均衡を得ることである。

と云つてゐる。彼は又た曰く、

一國の強大なるは、他國の弱小なるが爲めである。一方に得るところあれば、必らず他方には損するところがあらねばならぬ。

と。以上の言を玩味すれば、英國の國是とも云ふ可きものが、何物である乎。三百五十年間の英國の歴史は、歴々掌紋を指すが如く分明である。

ベーコンの門弟とも云ふ可き者にホップスがある。ホップスは曾てベーコンの誨を受け、ベーコンに従つて其の庭園を逍遙する時に際し、ベーコンが心頭に浮んだところのものを彼等從遊者に語るや、最初にこれを諒解し、これを文字に書き表したるものは、



彼であるといふ説が傳はつてゐる。彼は又た歐洲の各所を旅行し、佛國に於ては當時威權赫々たるリセリユウを近方から觀察し、イタリアに於ては地動説のガリレオと交遊したりと云へば、彼の得る所が如何に大であつたか知らるゝ。

彼の時代はビュリタン革命よりチャールス二世の回復期に亘り、彼は實にチャールス二世が太子たる時に、數學の教師であつた。ホッブスの政論は契約説を以て世界に知られてゐる。彼は曰く、

人間は生れながらにして心身共に互ひに平等である。其の平等から競争を生じ、競争からして戦を生ず。其戦は團體と團體との戦で無く、人と人との戦である。これが爲めに全く世の中は混沌として生産も無く、技藝も無く、文學も無く、社會的快樂も無く、唯だ恐怖と危険の連続のみである。即ち人生は寂寞であり、貧乏であり、卑猥であり、獸的であり、然も短命である。茲に於て互ひに相ひ約して、一人を選んでこれが首長となし、總ての者か其の命令に服従することを約し、茲に初めて平和が出来、又た安全が出来た。されば一度其の權利を移讓したる以上は、如何なる場合たりとも、

それを取戻すことは出来ない。所謂る君主の意志は法律で、其の臣下たる者は、唯だ君主の禁止せざる所を行ふを得るのみである。

と。彼の此論は、必らずしも専制を主としたるスチュアート朝を辯護したと云はんよりも、當時スチュアート朝を廢して代りたる、クロムウエルの總統政治を辯護したるものと見ることも出来る。何となれば彼は理論的の正統論よりも、現在の強權に屈從することを以て、彼の論旨に幾しとするからである。

然るに此の契約説は、ロツクに至つて全く逆用せられた。ロツクの父は清教徒派の兵士であり、彼も亦た其の傳統を紹ぐ者である。ロツクも亦た學者であり、同時に東西南北の人である。彼の「悟性論」は世界的に有名な大著であり、彼は英國經驗派の哲學者中に於ては、其の巨擘とも見る可き一人であらう。彼はホッブスの所見と全く反對に立つてゐる。彼の所謂る自然の状態は、ホッブスの説くが如き修羅場では無い。彼の説に依れば人間の自然状態は、



人間は人、人と闘ふ戦争状態で無くして、好意互助の平和状態である。但だ此の状態に安全を興へ、恒久性を興へんが爲めに、此に各人自由の意志に依つて、互ひに契約を結び、此の如くにして契約は成立つた。故に一度此の契約が成立したる上は、これに服従するは當然である。然も萬一君主が其の契約を破る時に於ては、これに反抗し、更らに其の契約を實行する者を選ぶことは、當然の道理である。

といふことである。彼は此の如くして一六八八年の革命—即ちジェームス二世を國外に追放して、オレンヂ公ウィリアム及び其妃メーリーをオランダより迎へたる—を辯護したものと云つても差支あるまい。然も彼は直ちに敵の室に入つて其戟を奪ひ、専制主義の爲めに立論したるホッブスの意見を翻して、自由主義の爲めに根本義を押し立てたこととした。彼の眼中には國家なる一の體系の存在を認めず、唯だ個人の集合體となし、其の目的や極めて制限せられたる範圍に於て、共同の便宜を擁護する者にして、一切の權利は各個人が固有するものとし、恰も國家を以て、有限責任株式會社と見做してゐる。

我等は今茲に此論の當否を論ずる者では無い。但だロックの此の社會契約説が、英

人の國家に關する觀念を、殆んど其儘に描き出したものと云ふことを、茲に特筆するの必要を感じる。要するにホッブスは荀子の如く、性惡説より發足し、ロックは孟子の如く、性善説より發足す。然も孟子も革命の權利を認めたる如く、ロックも亦た認めてゐる。但だ同じき所はこれに止まり、ロックは全く政治を一個の商事會社と見做し、孟子は政治を最高の理想を行ふものと見たる點に於て、趣きを異にしてゐる。

如何に英國の政論が他國に波及したる乎は、歐洲の歴史を知る者の皆な知るところである。佛國のモンテスキュー、ヴォルテール、若しくはルッソーの徒が、何れより彼等の意見を得來りたる乎。其の意見の酵母を得來りたる乎。佛國革命宣言の自由、平等、同胞の三主義の如きも、其の淵源は何れに在る乎。英國の社會契約論が、米國に渡り、米國の獨立檄文となり、それが又た佛國に移入せられて、佛國革命の宣言となりたるものにて、直接にせよ、間接にせよ、其の自家本元は、皆な英國にありと云はねばならぬ。

エドモンド・バークが、大聲疾呼佛國革命を非難したるも、革命論の原理原則は、殆



んど皆な英國より輸入したるものであることを、彼は或は忘却してゐるのではあるまいかと思ふ。

ヒュームの快樂説、ベンタム、ミル父子の功利説、スペンサーの虛無説に幾き程の物理學、若しくは生物學的進化論を應用したる社會平衡論の如き、何れも皆な個人主義、自由主義、享樂主義の範圍を超脱するものは無かつた。而して此の三主義が大手を振つて横行する時に於て、國家が衰亡せざらんとするも、夫れ豈に得可けんやであらう。今や大英帝國なる巨漢は、此の三主義を滿喫し、再起し難き程の病床に臥してゐる。

#### (第六) 土を離れ宗教を離る

英國は徹底したる個人至上主義を以て成り立ちたる國家である。されば國家泰平無事の際には、國務運用の上に、何等差支を生じないが、一度國家多事となれば、忽ち大なる障礙に當面せざるを得ない。これ個人の爲めに存在する國家が、其の個人に向つて國

家の爲めに存在する個人たらんことを要求せざるを得ないからである。一旦緩急あれば義勇公に奉ずるといふ如きことは、英國に於ては皆無ではないが、例外である。

斯る場合に處しては、國家は個人の爲めに存する國家であるが、其の國家を維持するは、即ち個人の利益をも擁護する所以であるからして、個人が國家の爲めに犠牲となるのは、窮極すれば個人が個人の爲めに犠牲となるといふ譯合となるといふ、廻りくどき論理の變轉に依つて、個人が國家の爲めに犠牲となることも要求せられ、又た實行せらるゝ次第である。

斯る譯合で、英國は生死存亡の十字街頭にあつて、尙ほ徵兵令を實行することが出来なかつた。出来てもそれは既に戦ひ酣の後であつた。然もその後にあつても、それが十分有效的には施行せられなかつた。而して此の如き場合に於てさへも、軍需品の製造に従事する勞務者が、賃銀問題に就て政府の脚下につけ込み、不常と云はずんば、適當の要求をなし、それが容れられずとて、平氣で同盟罷業さへも行つた。我國に於ては、斯る行動は取りも直さず、國家に對する謀反と見做される。然も英國にては、別に何人も



これを怪しむ者は無い。

ナポレオンは英人を稱して「前垂れ掛けの國民である」と云つた。正しく其通りである。英人は生馬の眼の玉を抜く如き敏捷なる國民ではなく、寧ろ鷹揚に出来上つてゐるが、併し其の根性は何處までも損得勘定を離れない。即ち前垂れ掛けの店員根性である。これが持前の海賊根性と共に、英國をして世界的大帝國たらしめた所以である。

併し其爲めに英國は土に親しむことを忘れ、農業を閑却し、一度海運の業停まれば、餓死せねばならぬ危険に陥ることさへも忘却してゐた。現に前世界大戦の時には、ドイツのUボートが猛威を逞しくし、其爲めにロンドン、百萬の市民は、殆んど二週間現狀を維持すれば、餓死せねばならぬといふドン底まで陥つた。

今日ではこれに懲りて相當の買溜めもなし、食糧の貯蓄もあるが、これとて無限ではない。前回は公園に馬鈴薯を作り、ゴルフ場に小麦を蒔くなど、随分應急の手當をしたが、それとても一時凌ぎで、間に合ふ可きものでは無かつた。

英人とても本來耕すことを知らない國民ではなかつた。牧畜は英人の最も秀でたる業務にして、羊毛の如きは歐洲第一の精良品であり、フランダール方面の毛織物業者は、全く英國の羊毛を原料としたものであつた。然るに其の精良なる羊毛を産出したる英國は、今日では輸出せざるのみか、殆んど自國で使用するものさへも、濠洲若しくはニュージーランドよりこれを輸入しつゝあるではない乎。グイクトリア女皇の中期に於て、穀物法令の廢止は非常なる論争の問題となつたが、幸にこれを廢止しても、反對者の心配した程多くの影響は無かつた。何となれば、當時外國から輸入した穀物は、自國生産の二割以上を出なかつたからである。

然るにそれより五十年を過ぎて、最早や英國はカナダに依存するの外、他に方便無きに至つた。凡そ文化の進程を顧みれば、第一次は狩獵的であり、第二次は牧畜的であり、第三次は耕作的である。然も英國は全くこれに逆行してゐる。從來耕作したる畠地は、擧げてこれを牧場となし、牧畜したる牧場は、擧げてこれを狩獵場となしてゐる。英國



の農民が土地を離れて流落しつゝある状態は、必らずしも最近のことではない。十八世紀の末には、詩人ゴールドスミスGoldsmithの如きは「荒村」の詩を作つて、農民の果敢無き運命を歌つてゐる。

それが時代と共に加速度に動き來つた。英國の所謂上流社會なるものは、そのノルマン征服以來の舊貴族たるを、大資本主義の波に乗りたる商工業階級より補充したる新貴族とを問はず、其の生活に缺く可からざるものは競馬である。狐狩りである。特に鹿、兎若しくは鷓鴣、鴨、山鳥、雉などを狩獵し、それを以て樂事と爲してゐる。其爲めには幾哩若しくは幾十哩といふ獵區を作り、狩獵區人を置き、年々多數の鳥獸を發育せしめ、これを以て狩獵期間の娛樂に供することとしてゐる。されば一回の所獵が鹿幾百頭、雉幾千羽などといふことは決して珍しくない。

斯る状態なれば、彼等は土地を全く獵場、競馬場、若しくはゴルフ場と心得、これを以て「陽春德澤を敷き、萬物光輝を生ず」る有難きものとは心得てゐない。

英國を亡したものは、英國を盛んならしめたるものである。英國民が土に親しみを失つたのは、商工業者として成功したる所以であるが、遂ひに其の商工業者の位地さへも保持することを失ふに至りたるも、亦た土に親しみを失ひたる爲めであつた。

次に我等が見通し難きことは、宗教の墮落である。アングロ・サクソンの悍猛なる海賊根性に、聊かにも道義の香りや、心靈の風格を寄與したるは、基督教であつた。英國の歴史に於てエドワード懺悔者が、如何に柔弱なる王であつた乎、同時に如何に篤信なる王であつた乎は、深き痕跡を其の史上に遺してゐる。

所謂清教徒革命なるものは、或る意味に於ては、政治の自由を國王より防禦し、若しくは要求する運動であり。經濟上では土地の分配、若しくは收税多寡の問題であるが、宗教上の問題であることも亦た決して否定することは出来ぬ。シーレーは、

曾てクロムウエルの時にも、恰もエリザベスの時と同じく、商業上の感化は、宗教上の感化に偽装して、其の勢力を張つた。



と云つたが、これは勿論それに相違無しとして、宗教そのものも亦た宗教としての感化を、個人に向つても、又た國に向つても及したることは、無視することが出来ぬ。世間ではクロムウエルは偽善者の骨頂と云ふが、それは冤罪である。クロムウエルは一方に於ては、アングロ・サクソン固有の海賊根性と、店員根性の權化であるが、同時に又た熱心なる基督教徒であつたことは、間違ひ無い。其の意味に於て、彼はエドワード懺悔者の後繼者と云ふことが出来る。彼が編成したる「鐵騎」の如きも、實に號令嚴命、秋毫も犯すところなく、他日解體の後、一人として浮浪人や、野盜の群に入つた者は無かつた。其の敵方たる王黨の面々もかく語つてゐる。

彼等は平和の仕事に於ても成功した。バン屋なり、石屋なり、荷車挽きなり、苟くも實直によく働く者があつたなら、それが先づクロムウエルの老兵であつたと判断して、大抵間違ひ無い。

此の宗教は實にアングロ・サクソン人にとつては、延命の靈藥であつた。爾來汗隆時

と共に同じからざるも、十八世紀の中期より下期にかけては、ウエズレーが宗教復興の運動を起し、國教より分離して、メソヂスト派を創立した。次には十九世紀の中期に、オックスフォード大學に於て、ニューマンを主として、他の同志が教會復古運動を起した。それも或者はローマ公教に轉じ、或者は英國國教に踏み止まり、十分の効果を及さなかつたが、又た宗教界に於ける惰眠を破る一大警鐘となつた。

爾後ブースの救世軍を擧げねばならぬ。英國國教よりメソヂストが出で來つた如く、救世軍は又たメソヂストより出で來つた。然もブースはウエズレーとは、恐らくは其の教養、趣味、性格に於て、對蹠的であつたと思はるゝ程、ブースは熱狂的であり、民衆的であつた。

而してグラッドストーンの如きも、クロムウエルと同じく、偽善者の骨頂と反對黨より謳はれたるも、彼は政治を以て唯だ自己の利益の爲めに、強者の權を濫用するのみを能事となすべきでないといふことだけは、明らかに認めてゐた。泥棒にも三分の理窟が



あるといふが、海賊國たる英國に於ても、實際に行はざるまでも、口では仁義道德を高調した。グラッドストーンの政敵ソルズベリー侯の如きは、彼の棺に向つて、「偉大なる基督者の經世家」と賞辭を呈するを惜しまなかつた。

然もその以後の英國は如何。英國の政治家として、何人が「基督者の政治家」の稱號を興ふるに足るべき乎。十九世紀の末期にグラッドストーンの逝くや、英國政界の調子は愈よ下り、政治家の調子は更らに愈よ下り、縱令空言だけでもせよ、基督者の風韻は全然土を拂ふに至つた。現在のチャーチル輩に至つては、雄辯にして鐵面皮なる海賊の子孫といふ以上に、興ふべき讚辭はない。

英人が宗教を見捨てた乎、宗教が英人を見捨てた乎、何れにもせよ、英人は神を畏れず、天を敬せず、物質萬能主義の海賊根性を、遠慮會釋なく發揮し來つた。かくの如くにして、自然に國家の元氣は消耗し、自潰作用を早むるのほかに餘術もなくなつた。

### (第七) 政黨亡國

英國の衰亡の多くの原因中の主なる一は、英國政黨政治の行詰りである。英國は政黨政治の發祥地にして、世の政黨政治を謳歌する者は、皆々英國を以て其の靈廟となしてゐる。耶蘇教徒のエルサレム、佛教徒のブダガヤ、回教徒のメッカ、儒教者の曲阜同様、政黨政治家にとつては、ウエストミンスター埠頭の英國議院は、神聖なる政黨政治の本殿である。然るに其の政黨政治が、英國を亡滅に導き來つた成行きを見れば、又た彼等にとつては意外とせねばならぬ。

元來英國の政黨は作意的に製造したものである。自然と云はんよりも、寧ろ偶然に出で來つたものである。チュードル朝の時には、議院も成る可く屢々開設しなかつた。時としては政府も人民も、議院の存在を忘却する程であつた。當時の國王は議院を開かねばならぬ程、財政に逼迫を來さず、うまく遣り繰りをなし、人民も亦た却つてそれに満足した程であつた。次のスチュアート朝に至つては、議院は屢々開かれ、開けば開くほど、一回一回と反對の氣分を猛烈ならしめ、此に所謂王黨と民黨との差別は出で來つた。ジエームス一世は哲學者でもあれば、神學者でもあり。學者としては田舎の大學の教授



位は優に勤まる程の學識を有つてゐた。其の著述も鮮くない。併し彼は治國平天下の道を知らなかつた。當時彼を「最賢者の大莫迦者」と評したるは、正しく其通りであつた。

其後のチャールズ一世に至つては、遂に戦争が勃發した。民黨は短髪であつた爲め短髪黨と渾名されてゐた。王黨は騎馬武者が多かつたので、騎馬黨とも云はれてゐた。チャールズ二世に至つて、王黨の天下は回復したが、ジェームス二世に至りて、又一度ヘンリー八世の時に排斥し去つたローマ舊教に回復せんと欲し、人民に向つて信教の無理押付けをなし、彼れや是れやで、遂に追放せらるゝに至つた。新たに反對黨より迎へられたのは、オランダのオレンヂ公ウイリアムであり、其妃メーリーであつた。

これよりして又たホイッグ黨隆盛の世の中となり、トーリー黨は殆んど影を潜むる迄になつた。次のアン女王の時には又た兩黨對立の状態を表はし來りたるも、アン女王の後、ハンノヴァーより迎へ來りたる國王ジョージは、既に英國王となつた時には、五十を過ぎてゐた。彼は全然英語を解せず、されば從來閣議には國王が親臨して、これを親裁

したるに拘らず、新來の國王は、英語を一切解せざるが爲めに、折角閣議に列しても、何の得る所も無く、其爲め閣議に親臨することを中止した。此の如くにして英國の責任内閣制は、異國より迎へたる國王が、英語を解せぬことに淵源する。偶然と云へば是程の偶然はあるまじ。

上記の如く國王が閣議の外に離隔したる英國内閣は、義理にも其の責任を議院に對して負はねばならぬことになり、此の如くして大臣の議會に對する責任は、出で來つたものである。而して同時に連帶責任は出で來つたものである。世間では「國王は君臨しても統治せず」といふ用語ありといふが、それが若し用語とすれば、それ以後の出來事である。

斯くてホイッグ黨は非常なる勢力を以て政權を執つた。それがジョージ三世に至つて、初めて英國に生れ、英語を解する、英國生え拔きの國王が出で來つた。彼は王權を回復せんとし、自から政を親しくせんとしたが、遂に其志を達する能はずして逝いた。



それよりヴィクトリア朝時代になつて、ホイッグ黨は自由黨となり、トリーパー黨は保守黨となり、アイルランド自治問題以後、自由黨より分立したる統一派が保守黨と合し、やがては保守黨全體を、統一黨といふに至つた。

而してアイルランド問題解決後は、再び保守黨となり、加ふるに第一次世界大戦後、労働黨の勃興は、遂に労働黨内閣さへも生ぜしむるに至つた。斯くて自由黨は殆んどバス一臺に其の黨員を乗せても餘り有る位の少數となり、自由、保守兩黨對立などは最早や過去の夢にて、今日に至る迄も名前だけの政黨政治を存しつゝある。然も今日に於て英國の政黨政治なるものは、謂はゞ名目だけで、所謂の政見に依つて黨派が成り立ち、其の主義、主張を、實際の政治に行ふなどといふことは、全く過去の夢に歸し去つた。

英國の政權は理窟面では國王より貴族、貴族より中流階級、中流階級より一般民衆といふ如く、其の政權を分配し來つたが、然も其の元締は依然として百家内外の貴族、若しくは富豪の手に存し、彼等の意志が政黨政治の假面を被つて、うまくも施行せらるゝ

に過ぎない。要するに英國のデモクラシーは、民衆のデモクラシーと云ふよりも、寧ろデモクラシーの名目に於て、貴族政治が行はれつゝあるものである。英國はノルマン征服以來の封建制度を、今日までも維持し、然も其の封建制度を、始終新たなる輸血を以て補充してゐるに過ぎない。

曾てブライトは、ヴィクトリア朝の中期に「土地の所有者は政權の所有者なり」と云つたが、今では其の土地の所有者なるものが、一九二〇年より一九二七年迄、約七ヶ年の間に、英國土地の半分以上の持主が變つたといふ程にて、これが皆なとは云はぬが、多くの意味に於て、貴族制度の輸血者と云はねばならぬ。

併し此の輸血者はユダヤ人、若しくはユダヤ人と極めて濃厚なる關係ある大資本主義の成功者にして、彼等は實に勝手に議會を支配することが出来る。曾て英國の老記者ロハ、英國の政治を論じ、

英國の政權は、所謂の交際社會と稱する一部階級の占有するところとなり、其の交際社會に容れられざる限りは、如何なる有爲の才幹あつても、到底關係たることは出来



といふ事實を擧げて、詳説した。今では労働黨の勢力が勃興して、必らずしもその通りではないが、然も主なる勢力は、依然として貴族、豪富の手に存し、例へば或時にはセシル家によつて、其家の頭領ソルスベリー及び其姪バルフォア、或は彼の長男及びロバート・セシル、ヒュウ・セシルなどといふ人々が、閣員及び其の要職を占め、當時世間では内閣を稱して、セシル旅館會社と云つたことがあつたが、それは全くその通りで、五人までも其の親族が内閣に列したからである。

又たチエンバーレン家が勢力ある時、英國の諷刺雜誌「パンチ」は、「帝國が膨脹する毎に、チエンバーレン家の請負ひ仕事は増加する」といふ諷刺畫を描いて掲げた。これはチエンバーレン一家は、バーミンガムに於ける諸種の軍需品製造會社の大株主にして、殆んどそれ等會社の有力なる部分は、チエンバーレン一族、及び其の仲間によつて所有、若しくは支配せられたからである。

現に一九四〇年に出版せられたる「大英帝國を支配する百家」と題する書籍がある。

これに依つて見れば、英國の貴族、豪富は、墓式に、政黨の相違などは頓著無く、互ひに相ひ結托して、其の政權を握り、其の利權を恣にしてゐることを暴露してゐる。悉くその通りと云ふ事は出来ぬが、稍々それに幾いといふことは、間違ひあるまい。

#### (第八) 空論亡國

英國政黨政治の流弊の最も著明なる一は、政見の爲めに議論を闘はすことである。別言すれば空論亡國である。英人は本來常識的國民にして、同時に實行的國民である。然るに政黨政治が板に付いて來た頃からして、英人は寧ろ言論國民となつた。やがては其の言論國民が、空論國民となつたのは、必然の勢ひであつた。

モルレーは嘗て曰く、

我等政黨人の大なる苦厄は、黨派相互の意見が、實際に於ては殆んど同一であるに拘らず、強ひてこれを黑白相違し、兩立す可からざるが如く説きなして、これを一般に受入れしむることである。



と。モルレーは「オネスト・ジョーン」ジョーンはモルレーの名で、正直者といふことである——と呼ばれたる、政黨者中に於て最も人格高き一人として、又たアイルランド自治論に於ては、グラッドストーンの右の腕として知られたる人である。その彼が斯く云ふからには、何人もそれを疑ふ者はあるまい。

元來妥協交譲はイギリス人の本色であつたに拘らず、政黨政治の爲めに、妥協交譲が出来ることさへも、其の極端と極端とを取つて、強ひて兩立出来ぬ様に仕向け、言論を闘はし、其の政權を獲得し、若しくは獲得したる政權を、一日も長く保持せんとした。

されば議院政治行はれて以來、イギリスには經世家も無く、政治家も無く、殆んど唯だ能辯、達辯、詭辯、贅辯、凡有る無用の辯論を逞しくする饒舌家のみが巢窟となつた。それで政黨の領袖は勿論、將來有爲の士にして苟くも立身せんとする者は、成る可く議會の辯論に浮身をやつし、それに依つて慾望する政界の高位、若しくは最高位に達せんことを努めた。

されば支那の凡有る政治家が、能文達筆の士である如く、英國の政治家にして、訥辯、能辯の差はあつても、一通り喋れない者は無い。否な喋らざれば政治家たることが出来ぬが、英國政治家の本色である。従つて國家危急の時に際しても、彼等は端的に其の意見を國民の前に訴ふるよりも、如何にして模範的能辯を開陳し得るかといふことに腐心する。

第一次世界戦争の劈頭に於ても、當時の外相グレーの演説などは、如何に素晴らしく簡潔、明白、真率にして、人を動かし得たかといふことを、今尙ほ取沙汰してゐる。今回の第二次世界大戦に於ても、チャーチルの議會演説、若しくは放送の如きも、英國では出来が良かったとか、出来が悪かったとか、恰も我が歌舞伎座に於ける菊五郎、吉右衛門の藝を評するが如く評判してゐる。

されば英國の政治家は、國家經綸の士よりも、寧ろ口の藝術家となり終つてゐる。従つて英國の政治家に、如何に多くの辯護士が頭を出してゐるかは、決して不思議のこと



ではなし。

ピット以後、最も長き相位を占めたるアスキスも辯護士である。初めはアスキスの同僚であり、やがては其の部下であり、遂にはアスキスに取つて代つたロイド・ジョージの如きも、田舎出の下級辯護士であつた。今は自由黨から種々の變化を経て、大法官となつてゐるサイモンの如きも、亦た辯護士である。

保守黨に於てもパークンヘッドは、即ち平民スミスとしての大辯護士であり、保守黨の爲めにアイルランド自治案の反對の最後の勇將であつたカルソンの如きも、亦た法廷に於ける最も有力なる辯護士の一人であつた。辯護士は法廷でこそ必要であるが、國家經綸の業に於ては、經國の士を俟たねばならぬ。

然も經國の士は所謂る言擧げせぬものである。我が大久保甲東の如き、西郷南洲の如きも、必要あれば其の意見を陳ぶるが、それ以外は容易に口を開く士ではなかつた。英國にも種々其の例外はあるが一例せばキッチナ將軍の如き。議院政治が最高潮に達した時には、英國の政治は最退潮に陥つた時であつた。

### (第九) 英國の癌愛蘭

我等は議院政治の最も惡しき例として、アイルランド自治案に就て語るであらう。アイルランドは昔より英國の癌であり、今も尙ほ癌であり、今後も亦た癌であらう。そのアイルランドの癌を見て、これに外科的療治を施さんとしたのはグラッドストーンであつた。世間ではグラッドストーンが、アイルランド自治黨と手を握つたのは、自治黨の援助に依つて、其の政權を獲得し、若しくは保持せんが爲めであると邪推した者も鮮く無かつた。事實或は其通りであつたかも知れぬ。

併しこれは賢明の措置であつた。若し當時アイルランドに自治を許したならば、今日のアイルランドがエール國となり、イギリスと全く没交渉で、イギリスの咽喉元に九寸五分を突付ける如き態度を取る様なことは無かつたであらう。然るに此の自治案に反對したる保守黨、及び自由黨より分立したるチエンバーレン其他の一派は、保守黨と連合して、統一黨の名の下に政權を獨占した。一九〇六年に至り、初めて自由黨が曙光を見



るに至つた。尤も其間に一寸自由黨が政権を取りたることもあつたが、それはグラッドストーンの最後内閣（一八九二年八月—一八九四年三月）から、ローズベリーの最短内閣（一八九四年三月—一八九五年六月）に續いて、やがて元の保守黨に戻つた。

自由黨が政権を獲得し、再びアイルランド自治案を通過するや、又た上院の反對に遭つて、遂に實施するに至らず、然も千辛萬苦、漸く其の目的を達し、それが愈よ實施せられんとするに際し、エドワード七世は崩御し、ジョージ五世の新政となつた。其の新政の略に國王の命令にて、宮中に於て兩黨の妥協會議を開いたが、國王の周旋にさへも合致せず、愈よ實行といふことになつても、反對黨たる保守黨は、議會の決議などを顧慮せず、アイルランドに斷然武器を輸入し、兵士を徵募し、非自治黨の最硬派カルソン、スミス等が其の總大將となつて、内亂を起さんとする間際になつて、第一次世界大戦は出で來つた。其爲めに漸く其の問題は中止せられたが、足掛け五年を経て、再び取上げらるゝに至つて、最早やアイルランドは從來の自治案に同意せず、殆んど獨立國の態度を以て英國に臨んだ。

其爲めに人心恟々、暗殺は大ひらに行はれ、安寧秩序などは、棄にしたくても無くなつた。而して英國が愈よ最後の讓歩に依つて、アイルランド共和國が出來上つた。それがやがては全然本國とは隔離して、今日では國號もエールと改め、從來英國より總督をアイルランドに置いた者も追返し、英國がドイツに宣戦したるに拘らず、アイルランドは斷然中立を守り、殆んど全く獨立の姿となつた。他の植民地は唯だ英國王に對する忠誠に依つて、大英聯邦の一となることを承諾したが、アイルランドは忠誠を宣言することさへも拒絶した。

自治案より獨立國に至るまで、五十年間の英國、アイルランドの歴史關係は、如何に政黨政治が國家の大國是を誤るかを證據立つる一大罪案と云はねばならぬ。昔はクロムウェルが長座議院に對して解散を命ずるや、彼は次の如く鬨言してゐる。

一六五三年の四月廿日、大統帥クロムウェルは議會へと入つて行つた。そして一つの椅子に腰をふるした。彼は耳を傾けた。が、我慢できなくなつた。そこで彼は立ち上



つた。「出て行きたまへ」と彼は云つた。「もう澤山だ。予は君たちのおしやべりをあしまひにしたい：君たちはそれでも議會だと自稱してゐる。がこれは議會でも何でも無いのだ：君たちの或るものは酔つ拂ひだし、でなければ色男だ：どうして君ら手合が神の恩寵もて議會であることが出来よう？ さあ行つた、予は命令する：」と、議會の権力の神聖な表章である槌を取り上げて彼はいつた、「このがらくたをどう片づけたらいいか？ 取り除けてしまへばいいのだ：」と。

此の如き場合は決して此の一場面ばかりでは無かつた。多くの場合に於て、英國の議會は殆んど蟬噪蛙鳴の府であつた。而して彼等は喋りつゞけて、遂に鯛が鳴きつゞ日の暮れるが如く、英國を衰亡に陥れた。

#### (第十) 植民地の土崩瓦解

英國には遠心力があつて、求心力が無い。全く無いではないが、遠心力に匹敵し得るものが無い。日本は引寄せられる國である。英國は押出す國である。日本は皇室中心の國で

あつて、皇室が恰も太陽系中の太陽である如く、總てのものを皇室に向つて引付け、皇室を中心に回轉してゐる。英國には其の所謂の中心力が無い。斯く云へばとて我等は英國人に國民性が無いと云ふのでは無い。寧ろ國民性は英國が島國であつた爲めに、歐洲の他の國家よりも、早く發達したといふことも出来よう。

併し其の國民性も、所謂のアングロ・サクソンの優越感となつて、世界に打ち撒かれてゐるが、世界に押出したる所謂の海賊共の子孫が、其の本國たる英國に對する忠誠の思想は、極めて稀薄のものである。曾て米國革命約二十五年前、佛國のテュルゴは曰く、植民地は果實の如く、熟すれば其の元木より離れて地に落つるものである。何れアメリカの如きも、やがてはカルタゴ同様になるであらう。

と。カルタゴはフィニキアの植民地にして、後にはフィニキアを凌ぐ程の國となつた。今日から見れば、テュルゴは、アメリカの前途に對して、其の豫言が正しく的中したと云はねばならぬ。



元來アメリカの移民は、英本國の政治及び宗教上の不自由を遁れんが爲に、自由の境地を求めたるものであるから、彼等が必ずしも當初より本國に對して忠誠なる臣民で無かつたといふことは、言ひ得らるゝであらう。

併し英國の憂は、英國が膨脹する毎に、其種が追々弛んで來ることである。即ち其の組織網が薄弱となり、尾大掉はざる状態を現出することである。大英帝國の音頭取りとも云ふ可きシーレーは斯く云つてゐる。

人種統一は、大英帝國の安全と恒久とに於ける主なる力である。即ち濠洲の如き、ユーロランドの如き、若しくはカナダの如きが其通りである。但だインドに於ては、人種も異り、宗教も異り、言語も異なるが、然も其のインドを征服したものは、イギリス人の力といふよりも、寧ろインド人の兵力であつた。即ち英國人の兵力は五分の一にして、五分の四はインドの兵士であつた。さればインド人も此事を熟知して、それがインドを英本國に繋ぐ忘れ難き因縁となるであらう。

併しこれは餘りに蟲のよき話である。インド人は斯るイギリス人が詐謀を用ゐ、インド

を征服したる狡猾手段を恨んで、骨髓に徹してこそ居れ、これを有難しとして、其爲めにイギリスに心服するなどは、思ひも寄らぬ話である。

世間では第一次世界大戰に於て、カナダや、濠洲や、南阿や、インドが、それ／＼本國に向つて援助を效したることを見て、大英帝國も思つたよりも、其の組織は堅實であり、これが瓦解するなどといふことは、到底有り得可きものではないと思ふ者もある。併しそれは畢竟皮相の見に過ぎない。

彼等が英本國を援けたのは、各々自ら利せんとするが爲めであつた。成程インドは世界第一次大戰の際には、一億五千餘萬ポンドの戦時公債を分擔し、一億ポンドを寄附し、八十萬の兵を出した。インドとしては思ひ切つたる奮發であつたが、それはインド人が戦後に於ては、インド人の希望する通りの自由の政體、自治の制度を興ふるといふ、固き約束を信じた爲めであつた。然るに戦後英人は、殆んどそれを打忘れたるが如く、金を約して石を興へんとした爲めに、今やインドの獨立運動は、我等の眼前に火の手を擧



げつつある。カナダの如きは、若し萬一ドイツに與みせん乎、隣國の合衆國は固よりドイツに與みす可き筈はなく、忽ちカナダは合衆國の爲めに、兵力を以て征服せられずんば、經濟力を以て壓迫せらるゝに至るは必然のことであるから、それよりも寧ろ英國の依頼に應じて、軍需品を生産し、或は義勇兵を出したのである。

濠洲としても亦た然り、協商國側に加はつて、本國と態度を一にした方が便宜であつた爲めであることは云ふ迄も無し。

然も濠洲と英國との連絡は、我が帝國海軍の援助に依つて保たれたことは、明白なる事實である。若し萬一濠洲が同盟側に與みせんか、日本の海軍は忽ち濠洲を封鎖したであらう。

南阿に於ては、當時政權を執つてゐたボタ及びスマツツの一派は、其の反對者たるドイツ黨を壓せんが爲めに、本國に味方したのである。されば彼等は愈よヴェルサイユ會議となつては、カナダのオルデン、南阿のボタ及びスマツツ、特に濠洲のヒューズなど

は、會議の席上、傍若無人に振舞ひ、本國の代表者ロイド・ジョージや、バルブオーアなどを手古摺らした。即ち英本國では、各所の植民地を英國の領土として取扱はんとするに拘らず、彼等は皆な獨立の國家として、自ら立たずんば已まざらんとする氣魄を示し、茲に本國と彼等との間には大なる距離を示した。斯くて女皇の五十年祝賀の際に、各植民地より來りたる首相の會議は、當時の英國首相ソルズベリーが鬨言したる如く、首相會議が談偶々大英帝國編成のことに至れば、混沌状態で、「斯る問題よりも、寧ろ大英帝國內の共同防禦の實用問題を議するに如かず」と云つた通りであつて、本國政治家が熱中する程に、植民地の政治家は、銘々の封土以外には、別に多くの關心を有つてゐるは無かつた。英國の最大隆盛期たる、ヴィクトリア女皇の在位五十年祭にも、英本國の首相と植民地各首相とは、同床各夢の状態であつた。況んや其の以後に於てをや。

然のみならず、從來農業國であつたカナダなども、第一次世界大戰の時に、本國の爲めに軍需品を製造したる結果は、やがて半ば工業國化し、濠洲も亦た稍々其の方向に進



み、英本國とは殆んど競争の地に立たんとするに至つた。然も國際聯盟の出来るや、各植民地は何れも自國を代表して其の委員を出し、愈よ銘々勝手の振舞をなし、英國帝國主義政治家の企畫通り、彼等を大なる英帝國の範圍に入れて、節度ある運動を爲さしむることは、殆んど不可能となつた。謂はゞ英國帝國主義政治家は牝鶏の如く、植民地の各首相は其の牝鶏が孵したる家鴨の雛の如く、如何に母親が悲鳴を擧げて、雛鳥は各々勝手に水上に飛び去つた。斯くて昭和元年（一九二六年）英帝國政治家の豫想したる、英帝國なる體制を去り、愈よ大英帝國も其の領土も、何れも大英帝國內に於ける自治團體にして、帝冠に共同の忠誠に依つて繋がる以外には、内治外交一切に於て、銘々自主であることを定めた。

現に其の以前一九二三年、カナダと合衆國との間に、漁業條約を締結した時には、カナダ政府はワシントンに駐在の英國大使がこれに調印することを好まざる旨を公にした程にて、此の如く帝冠に對する忠誠以外には、本國と屬領との間には何等關係無く、全く沒交渉となつて來た。

斯くて昭和六年（一九三一年）英帝國會議の決定に依り、所謂るウエストミンスター法發布せられ、英帝國は愈よ前申す通りとなり、カナダ、濠洲、ニュージーランド、南阿、エール、ニューファウンドランドの六ヶ國は、皆な本國と平等の位地に立つことになつた。此まで行けば英帝國は事實の上に於ては、殆んど全く土崩瓦解したものである。されば昭和七年（一九三二年）所謂るオッタワ會議の如きも、英本國が本來の自由貿易を捨て、關稅政策を實施し、英帝國以内のみ自由貿易政策を行はんとしたが、これも事實は植民地の方にのみ都合がよく、本國にはそれ程の効果は無かつた。何故なれば、植民地は本國に對して關稅の障壁より免がれたるも、それは植民地の利益にして、本國は却つてこれが爲めに世界に於ける得意場を失墜することになつたからである。

### （第十一） 英國に於ける君主制

凡そイギリス人ほど、手前勝手の者は無い。如何なる矛盾を振り切つても、自分の都合次第に、勝手に振り廻してゐる。其の國王さへも都合が悪ければ、勝手に國外に追ひ



出して、いざ大英帝國の凡有る所領が分離獨立せんとする心細さに出會するや、直ちに國王に對する忠誠心を利用して、其の崩潰せんとする大桶の箍たらしめんとしてゐる。それ程帝冠が大切であるならば、何故に帝冠に對しても、彼等の根本義を建て直さなかつた乎。諺に「泥棒を見て繩を縛ふ」といふが、イギリス人が今ま此に繩とした其繩は、殆んど朽ちたる繩に外ならなかつた。それも其の責任は、英國の王室よりも、寧ろ英國の憲法にあると云はねばならぬ。アナトール・フランスは曾て曰く、凡そ英人の表面的の理想程、淺薄俗惡なるものは無い。ところがその潜在意識に至つては、實に精微を極め、深邃にして容易に計り難きものがある。と。それ程に英人は如何なる無理でも、不理智でも、必要とあれば、遠慮なく押通す鐵面皮を有つてゐる。

英國の憲法では、國王を有限責任會社の會長か、社長に比してゐつゝも、いざとなれば國王に對する忠誠で、濠洲でも、カナダでも、南阿でも、甚しきはインドさへも、それで縛り附け得るものと信ずるものゝ如くである。

話變つて英國の君主制も、ヴィクトリア女皇の中期以後には、頗る怪しくなつた。ヴィクトリア女皇が、皇婿アルバート親王を喪び、其爲めに喪服を着て、公開の場所にも出ず、引込んで寡婦暮しをなしたる時代には、英人中には可成り不平を言ふ者もあり、其爲めに一時は共和論さへも、實際問題となつて議會に飛び出した。チェンバーレン、デイルク、ブツクローなどは、其の録々たる主張者であつた。

斯る場合に、皇太子エドワードが、社交人として世間に持囃され、其爲めに若干の緩和をした。併し晩年の女皇は頗る國民の人氣を博して來た。女皇の美德を擧ぐれば、彼女も勉強家であつたことに間違は無い。パジオは英國憲法を論じて、

英國の君主は相談を受けることと、善誘することと、忠告することである。

と云つたが、女皇はなか／＼それどころでは無かつた。女皇の政治的文書なるものは、實に驚く可き浩瀚なもので、如何に女皇が當局の政治家と交渉したる乎は、それに依つて知ることが出来る。



例へばグラッドストーンの如き、八十にも幾き老政治家に對して、其の演説が過激であつた杯と云つて、言葉咎めをして叱り飛ばしてゐる。又閣僚の選擇などに就ても、頗るやかましく、總理大臣が書き上げた人名が、素直に、神妙に、其儘に通過するとは頗る困難であつた。又首相の選擇なども、多數政黨の首領であるから、其儘内閣組織を命ずるなどといふことは無く、往々幾多の曲折を経たることがあつた。如何に女皇が其の政權を振舞つた乎は、「ヴィクトリア女皇の政治的勢力」と題して、克蘭ク・ハーデーが一九三五年オックスフォード大學出版部より刊行したる一書を見れば明白である。

人としては頗る愛憎強く、特に其の中期にはユダヤ人の宰相ヂスレーリに手玉に取られたるが如き傾きがあつたが、併し堅實でもあり、剛情でもあり、英國宮廷にしては珍らしく清潔に幾きものがあつた。世間ではスコットランド人のジョン・ブラオンなる木強漢を従者として、餘りにそれを寵用し過ぎたなどといふものもあるが、それは專ら物笑ひの種で、悪評の原因では無かつた。

要するに女皇の在世六十餘年間は、英國にとつて君主政治の全盛時であり、英國の王位もこれで愈々確實となつて來た。

次に女皇の後を紹いだのが、エドワード七世である。エドワード七世は、六十歳を過ぎるまで、皇太子であり、然も其の多くの歲月は、皇室を代表して社交方面には相當の仕事をしたが、政治には一切關係せしめられなかつた。グラッドストーンが女皇に向つて、

今少し重要な政治文書をも、お示しあつては如何。

と進言したるに、女皇は一言にてこれを拒絶し、

國家の機密が、相場に利用されては、たまるものではなからうと云つた。

元來エドワード七世は、女皇夫婦の嚴重なる監督と規定の下に、極めて嚴肅なる教育を施された。甚だしきは、皇太子が學生の時には、其の襟飾りの色合ひ、縞柄さへも、女皇が選定した程であつた。然るに其の嚴格なる教育が逆効果を來たし、此に完全なる



不良少年が出来上つた。

凡そ世間でいふ飲む、打つ、買ふといふ三拍子が、皇太子にはよく揃つてゐて、其の長き皇太子時代には、英國と云はず、ヨーロッパ大陸の話題となつた。皇太子は或時には詐欺賭博事件の裁判や、或時には離婚の裁判に、参考人とか、證人とかいふやうな役目を勤めねばならぬことさへあつた。曾て「タイムズ」の紙上に皇太子の行動に就て、警告的の文字が出で来るや、女皇はわざ／＼主筆ダイレインに向つて、感謝の意を表した。而して皇太子も亦た賭博事件に就ては、従来は兎も角も、今後は決して問題を惹き起す様なことはしないと、カンタベリー大僧正に詫言交一本を送つた。

併しエドワードは決して道樂者だけではなかつた。一方には競馬、賭博、投機其他良からぬ方面に於ての悪友の中心でありつゝも、他方に於ては世界外交の動きによく氣を付け、それを打診することも怠らず、且つ力めて衆庶の好むところに意を用ゐ、如何なる場合でも國の爲めに盡すといふことだけは忘れなかつた。

或者は英國皇太子は、フランスの賣笑婦の口より、よく政界の機密を聞き出したなど

といふ程であつた。佛國と反目しつゝある間柄を一變して、英佛協商となり、やがて露國をも其中に加ふるに至りたるは、未だ必らずしも彼の力のみとは云はぬが、然もバルフォアなどが彼の力として認めたるよりも、より大なる効果があつたことは、疑を容れない。

日英同盟の如きも又た然りであつた。伊藤公が露國にてウキツテと日露協商を議して成らず、踵を回らしてロンドンに來たらんとするを聞くや、彼は當時の首相ソルズベリに向つて、季節が恰もクリスマスに近く、外客を接待するには甚だ都合の悪しき時節であるに拘らず、「首相邸宅ハットフィールドに招待しては如何」と申送り、且つ「自分も正式の謁見を興ふ可し」と云ひたるが如き、其の注意の行届いたことが判る。

日露戦争の如きも、我が資金をニューヨーク及びロンドンにて募集の際には、若干其息が掛つてゐたことは、今日では敵國といひながら、我等はこれを忘れてはならぬ。或た明治四十年伏見宮貞愛親王が、山本、西兩將を従へ英國に赴かるゝや、エドワード七



世は、親王の御滞在、特に當時上演中なる『ミカド』劇の中止を命じた。それは固より我が皇室に對し、我が親王に對し、敬意を拂ふ爲めであつた。

彼は六十歳を越えて、漸く帝位に即き、足掛十年にして逝いたが、兎も角も社會はエドワード朝に至つて愈よデカダンとなり、頹廢的氣分を來たした。然も政治の方面に於ては、決して無謀無策の其日暮しのみといふことは出來なかつた。

エドワード七世は凡有る過失があつても、若しくは罪惡があつても、一國の元首として、國政を指導するの方針に於ては、確固たるものがあつた。國家經綸の大策は縱令遺憾なしと云ふ能はざるも、同時にまた全く種切れであるといふことは出來なかつた。

ジョージ五世は其父ほどの不評判も無ければ、父ほどの好人氣も無く、先づ毒にも藥にもならぬ君主であつたが、我等が今ま此に一言するのは、エドワード八世である。

## (第十二) 元首の個人主義

エドワード八世の一代程奇しきものは無かつた。彼はその年齢に不相應に、凡有ることを聴き、凡有ることを見、凡有る人に接し、凡有る場面に遭遇した。然も彼の知識は只だ寫真機同様で、凡有るものをその儘断片的に寫すのみにて、何等一つに纏まつたものは無かつた。彼には深慮も無く、自省も無く、心配も無く、憂鬱も無かつた。面白く、をかしく、勝手に、氣儘に暮して來た。彼は年少にして世界大戰に参加し、實戰の際にも勇敢であつたとの評判である。兎に角彼は几帳面なことが嫌ひであり、型破りが好きであり、彼の日常生活は、脱線から脱線に續いてゐた。其爲めに彼は勞働階級には極めて受けがよく、其の曾祖母であるヴィクトリア女皇の嚴肅無きも、其の祖父であるエドワード七世の衣鉢を嗣ぐに足ると世間から思はれた。

而して彼は世界の到る處に旅行したが、世界では英國は無二の商品賣り廣め人を得たと持囃した。それ程彼は下情にも通じてゐた。それ程彼は到る處の人氣を引き摺つてゐた。我國にも恰もワシントン會議の調印せられた大正十一年四月に訪問した。我等には別に大なる印象も遺さぬが、但だ當時の新聞に、皇太子が日光から中禪寺に赴く途中の



茶店で、法被を着、其の隨行者を人力車に乗せ、自から車夫となつてこれを挽いたといふ記事、及びそれに配する寫眞を見たことを記憶してゐる。これも一興には相違無いが、太陽の没せざる程の廣き領地、即ち世界三分の一の土地を領し、世界四分の一の人口を有する大帝國の皇太子としては、決して相應の遊興でないといふことだけは、何人も感ぜざるを得なかつたであらう。

皇太子が到る處で調子外れの行動をなし、或時には落馬して、其首の骨を折つたといふことであり、それが議會の問題となつたこともある。

彼は一八九四年に生まれ、一九三六年に位に即き、而して三百二十五日の後、同年十二月十一日に退位した。これが所謂シンブソン夫人事件である。此の事件に就ては、世間に多くの文書がある。併し我等は決してその文書には興味を有たない。我等は許して以て直しとする者を惡む。況んや既に過去に屬し、彼も亦たウインザー公として日蔭の身となりたる今日に、事々しく斯かることを云ふは、最も好まぬところであるけれども、

も、英國の潰崩を語る際には、此事を見遣すことは出來ない。即ち如何に個人主義が、イギリスの國民にも、又た君主にも徹底した乎といふことの一の證據として、此の如き事が出で來つたことは、イギリス人の希望する君主への忠誠を以て、正に瓦解せんとする大英帝國を繋ぎ止むる力にせんとするも、出來得ざることを明かにする爲めに、茲に語ることに已む無きに至つた。

元來皇太子の弟達三人は、何れもそれ／＼結婚したるに、獨り其兄たる皇太子のみが獨身であるといふことは、不思議であつた。皇太子にして若し手を差向けんとせば、何れの宮廷にても、何れの名家にても、必ず其の候補者は有り餘る程であつたらう。然るに意外にも、案外にもシンブソン事件なるものが起つた。

シンブソン夫人なるものは、世間ではユダヤ人の系統であるといふが、必ずしもさうであるとは請合ひ兼ねる。兎も角も彼女は米國ボルチモアに生れた。彼女の名はウォーリス・ウォーフィールドである。彼女は年頃となつて、米國の海軍飛行中尉スベンサ



と結婚し、上海や北京などにも往來したことがある。如何なる故か彼女は、若き海軍飛行士官スペンサーと離婚し、幾程もなくシンブソンなる者と懇意になつた。シンブソンは既婚の男子であつたが、何故か離婚し、彼女と結婚した。彼はシンブソン船會社の代理人として、ロンドンに住することになつた。やがてシンブソン夫婦は英國皇太子と懇意になり、皇太子は自から自動車を運轉して、夜會からシンブソン夫婦をシンブソンの宅に送り届けたこともあつた。しかしして宮中の録事を見れば、皇太子の晩餐に招ばれる者の名前の中に、往々シンブソン夫婦の名を見出すことがあり、世間では左程世の中に知らぬ人が、何故に斯く皇太子の優遇を受くる乎と驚いてゐた。然るに程なく宮廷録事にはシンブソン夫妻でなく、シンブソン夫人のみが、他の知名の人々と招待を受くることとなつたことが表れた。特に驚く可きことは、地中海邊に於けるヨットの旅行に同伴することになり、或はチロルの山中に於ける冬季競技場などにも同行することになり、苟くも皇太子の在るところ、影の形に添ふ如く、シンブソン夫人の名があつた。然も皇太子の旅行中、公式の案内にも、シンブソン夫人と同行であらざる限りは、一切

其の招待を受けぬといふことになつて、其爲めに随分評判になつた。

然も兩人にて地中海沿岸附近の市街に買物に出掛けたなどいふ寫眞が、遠慮會釋無く米國の新聞に掲載せられ、評判は寧ろ足下よりも、米國及び植民地の方が甚だしくなつた。

斯る最中に、一九三六年一月二十一日ジョージ五世は世を去り、エドワード八世として皇太子は踐祚した。皇帝になつてから最も世を驚かしたのは、同年八月、皇帝がヨット「ナリオン號」で、地中海のアドリア海方面に巡幸の際には、シンブソン夫人も其の一行に加はることになつた。此の旅行でも、如何なる場合でも英國皇帝一人では、招待に應ぜぬといふことになり、爲めに從來の例を破つて、ハンガリー政府では、エドワード八世とシンブソン夫人を招待したといふことである。

斯くて同年十月に、愈よウォリス・シンブソン夫人離婚訴訟の報が世に表はれて來た。斯くてシンブソン夫人は、其の夫婿アーネスト・シンブソンが、己に對して貞節を



破つたと申立て、遂に離婚訴訟は成立し、茲に於てシンブソン夫人は、六ヶ月の期間を過ぐれば離婚が確定し、何人とも結婚するの自由を得た。

果然問題は一九三六年十二月に爆發した。餘りに米國初め他の方面の新聞、雜誌の記事が押へ切れぬ爲めに、英國の新聞は沈黙を守つてゐたに拘らず、遂に議會の問題は此事に及び來つた。當時米國新聞王ハーストは、英國ウエールズに於ける彼の別邸に在り、此に於て皇帝の補助秘書官サー・ゴッドフレ・トーマスに面會し、其の事件の要領を得、直ちに左の如き電文が大西洋を越えて、太平洋岸に達した。

數日中にボルチモアのアーネスト・シンブソン夫人は、英國に於て離婚の許可を得、八ヶ月後には英國王エドワード八世と結婚するであらう。

事茲に至れば、黙視する能はず、遂に議會が其事を論議することになつた。

この爲めに首相ボールドウィンは、凡そ八回謁見した。然も遂に皇帝の所信を翻へすことは出来なかつた。皇太后メラーが如何に皇帝を諫めたかは、固より論を俟たぬ。

シンブソン夫人は「自分の一身に依つて皇帝の決意を妨ぐる如きことは一切有たぬ」と公表し、縱令皇帝が結婚の約束を取消すも、自分に於ては何等異存無いといふ意味を表はした。併し皇帝は初めから結婚するの意志であり、出来ることならば王位も辭せず、結婚もなし、但だシンブソン夫人の待遇を、皇后とせず、其の所生を相續の系統より除くだけのことにて、此局を了せんとした。然も英國には斯る先例は曾て無いとの議論の爲めに、遂にそれが行はれなかつた。

何れにしても個人主義の英國に於ては「皇帝が飽く迄も其の意志を徹底した」と云ひ、それに同情する者も少くなく、議會でも「これは唯だ國王一個の私事ではない乎、斯ることは我等の容喙す可き限りではない」と云ひ、これを看過せんとしたる者もあつた。

我等は個人として何等エドワード八世に對して、批判を加ふるものではない。唯だ國王の天職が何物であるかといふことに考へ及ぼしたならば、かゝる際どいところにて、落著く前に反省す可きあらうと思ふ。然も其の反省が無く、世間も亦た反省無きについて、多くの疑問を挾まず、行雲流水に經過し去つたのは、一方から見れば實利主義、



便宜主義の國であり、他方から見れば、個人主義の徹底したる國であるといふより外は  
あるまい。同時に斯る行動が、果して大英聯邦を堅持する紐帶たる力があるや否やに就  
て、頗る疑問とせざるを得ない。即ち支那人の言葉に「朽索の六馬を馭するが如し」と  
あるは此事であらう。然らば即ち何物が能く敢て大英帝國の崩潰を禦ぎ止め得可き乎。  
進退維れ谷つて、恃む處は唯だ一の米國のみ。然もこれは老いたる蛙が、毒蛇の口に飛  
込さんとするの類に過ぎない。(昭和十八年四月十八日)(完)

### 英國悲劇餘論



## 英國悲劇餘論

### 猶太禍

#### 一、英國宮廷と猶太人

凡そ世の中に猶太人ほど不思議の者はない。彼等は二千年來自國を持たぬ民族にして、世界各國—疎密、濃淡はあるも—凡有る所に散布し、凡有る所で迫害せられ、二千年來世界人類の嫌はれ者として、なほ今日まで憎まれ子世にはばかりの状態を維持してゐる。彼等の數は概略一千二、三百萬と云ふが、如何に多く見積つても二千萬に上ることはない。何れにしても世界人口の百三十分の一くらゐに過ぎまい。即ち他の民族百三十人に對して猶太人一人の割である。然るに眇たる此の猶太人が、何れの世、何れの時、何れの國、何れの場所でも、皆相當の地位を占め、勢力を持ち、殊に現代に於ては、アングロ・サクソンの中に深く喰込んで、恰もアングロ・サクソンと猶太人とは—譬へば放



書者と花柳病との如き一切つても切れぬ至密、至近の關係を持つに至つたのは、其事があまりに現實にして、何人も之を不思議と氣がつかぬ程まで、猶太勢力は増進し來つた。

猶太勢力は英國に於ても米國に於ても、其の國家の根本に喰込んでゐる。恰も白蟻の如く、又た生木の本幹を蝕む害蟲の如く、その蟲を退治すれば併せて其の木自身も伐採せねばならぬ程になつてゐる。今まやアングロ・サクソンと猶太とは相依り相頼つて、全く相持ちの姿となつてゐる。詳らかに云へば表はアングロ・サクソンであるが、裏は猶太人である。英米兩國の大政治家なども、要するに猶太人の黒頭巾が躍らせる人形に過ぎない。我等は今まこゝに専ら英國に就て其の一端を物語るであらう。

猶太人と英國との關係は、エリザベス時代、シェークスピアが戯曲「ヴェニス商人」に描き出したるシャイロック其人によつても想像がつく如く、古き關係である。何れの國でも猶太人を迫害したが、單り英國のみは迫害せられたる猶太人の隠れ家として、彼

等を厚遇とは云はぬが、寛容し、その爲めに彼等に依つて尠からざる富を獲得した。斯かる歴史的話は姑く措き、我等は先づヴィクトリア朝の一大猶太人ヂスレリーに就て一言する。彼は政治上の立身出世を得る爲めに、表面猶太人たることをやめて、出来る限り英國紳士の風を装うた。然し彼の骨髓が如何に猶太的であり、又た彼の野望が如何に猶太的であつた乎は、彼の著したる小説を讀めば、如何なる遲鈍の者でも看取するところが出来る。

彼は實に猶太族の代表者であり、崇仰者であり、併せて宣傳者であり、其の宣傳の實行者でもあつた。彼は日本でいへば學問あり、才藝あり、辯舌ある天一坊であつた。而して彼の大ヤマは當つて、英國第一の女性、ヴィクトリア女皇を擒にした。彼は異性の心を獲得するに就て、非常なる手腕を持つてゐた。彼が保守黨の首領まで陞りつめたるは、固より彼の自力に相違ないが、其の自力を發揮し得たることは、英國の上流社會貴婦人の同情によつたことも固よりである。而して其の貴婦人中の貴婦人に、ヴィクトリ



ア女皇を第一人者として數へねばならぬ。彼の政敵であるグラッドストーンも、デズレリーが女皇の寵信を得る以前までは相當の待遇を受けた。然るにデズレリーが女皇の寵を専らにして以來、グラッドストーンは忍び難き薄待處遇を受けた。グラッドストーンが曾て最後に女皇に謁見し、最後の内閣首相の印綬を奉還するや、女皇はこの四回首相となり、半世紀以上に亘りて國家に奉仕したる老政治家に對し、之まで永年御苦勞であつたといふ一言さへも與ふるを吝んだ。流石のグラッドストーンも、其の日記には自分分が中年時代シリリーの旅行に驢馬を乗り倒さんばかりに乗り、最後に飄然として驢馬と別れ、立去つたることを回想し、恰も我身を驢馬と引較べて感慨の情を漏らしてゐた。

凡そグラッドストーン程女皇及び皇室に忠誠なる者はなかつた。議會に屢々提出される皇室費削減案の如きも、グラッドストーンが極力之を制止した。又た諸皇子、皇女の成立に就て國庫より其の定額を支出することも、グラッドストーンが主として之を首唱した。グラッドストーン微りせば、恐らくは君主政治を變じて共和政治となすの提案も、

成立せざるまでも、議會に於て若干の賛成者を得たかも知れぬ。然るにそれ程まで女皇及び皇家に忠勤を效したる彼は、女皇よりして殆んど逆賊の待遇を受けた。グラッドストーンの子である子爵グラッドストーンは、これ畢竟政敵デズレリーが女皇の聰明を蔽うた爲めであると明言してゐる。勿論此言には女皇がグラッドストーンの革新的政策に反對したる爲めといふ一事を割引せねばならぬ事もあらう。そはともかくも、何れにしても女皇は最初にはメルボルン卿、次には皇婿アルバート親王、最後にはデズレリーを信寵し、殊にデズレリーは彼の死後も尙ほ彼の幽靈が女皇の心を捉へてゐた。斯くの如くにして猶太的勢力は英國宮廷の最奥、最高所を占領した。

さてデズレリーは何物を英國に與へたかと云へば、彼は埃及王よりスエズ運河の株券を買収し、忽ちスエズ運河の支配權を獲得し、印度に於ける最便、最近の通路を開拓することを得た。次に英國女皇に印度皇帝の稱號を加へ、英國の東洋に於ける勢力を、名實共に永久不變のものたらしめんと企てた。次には地中海に於ける要衝の一なるサイプ



ラス島を獲得した。次には露國と競争して東洋に向つて英國の勢力を擴張することに努力した。凡そ英國の帝國主義なるものはチエンパレーンに依つて始められたと云ふ者あるも、其實はデスレリーが開山祖師であると云はねばならぬ。猶太人は東洋人である。故に猶太人は東洋のことと云へば殊更ら我物の如く考へてゐる。英國人が東洋に於ける凡有る虐政、凡有る貪欲、凡有る搾取はみな此の動機より來るものであり、其の動機は全く猶太的推進力によつて出で來りたることは聊かたりとも疑ふの餘地は無い。

× × ×  
但だデスレリーは猶太人として、私財を獲得するには比較的淡泊であつた。彼が若し猶太的貪欲を以てせば、其の政治的機密に依つて一攫幾千萬の奇利を博することを得たが、彼の一生を通じ、彼は借金は遺さなかつたが、生計には寧ろ苦勞し、首相を罷めた後には彼の著作の印税で其の缺乏を補うたといふことである。彼の最後の小説「エンヂミオン」の如きが即ち其の爲めに出來たものと噂されてゐる。然しながら公事にかけては、彼ほど不謹慎、彼ほど放膽、彼ほど無軌道に其の術策を逞しくした者はない。關中

飛躍と云ふ熟語は、彼から始まつたものである。

さて次のエドワード七世時代となれば、方面は變つたが、猶太の勢力は更らに其の方面より宮廷に接近し來つた。エドワード七世は六十歳を過ぐるまで皇太子であり、其間彼の周邊には凡有る如何はしき人物が集つた。其中には山師もあり、投機師もあり、金融業者もあり、競馬士もあり、一々數ふるに遑あらぬが、其中で彼の密友とも云ふ可き一人にサー・アーネスト・キャツセルがある。彼は猶太の金融業者にして英國に隠れなき富豪であり、恐らくは皇太子の機密の費用は彼が若干支辨したものと世間では評判せられてゐた。されば彼が踐祚以來、依然エドワード七世の身邊に於ける一の勢力であつたことは勿論にして、日露戦争の砌に日本の公債募集に就き、ニューヨークに於ける猶太人の金融業者シフ、クーン・ローブ等と呼應して其の公債に應じたるが如きも、彼の方與つて少くなかつたといふ。而してそれがエドワード七世の意を承けて爲したることであるのも、強ひて臆測を逞しくするにも及ぶまい。

## 二、マルコニー無線電信事件



翻つて宮廷以外に於ける猶太の勢力を見れば、英國の二大政黨たる保守黨と自由黨は、何れも其の黨費の若干、猶太の手に依り支出せられたることは疑ひを容れず、唯だ巧みにそれを隠蔽してゐるが、偶々マルコニー無線電信事件が其の尻尾を暴露したるに過ぎない。マルコニー無線電信事件といへば、一時は英國の政界を撼がしたる一大地震にして、其の爲めには英國自由黨の内閣は殆んど一掃りに掃り潰されんとした。今更ら其の顛末を茲に詳説するの必要は無いが、極めて簡単に述べんに、一九一二年三月七日、當時の逓信大臣サミュエル（今日のサミュエル子爵）がマルコニー會社に無線電信の御用を申付けた。サミュエルは固より猶太系の政治家である。日本にも會て彼の同族サミュエル石油會社の支店が存在した。

さて其のマルコニー會社の總支配人はゴッドフレイ・アイザックスにして、彼も亦た猶太系英人である。彼の弟ルーファス・アイザックスは當時自由黨アスキス内閣の検事總長として、内閣に於ける法律大顧問である。逓信大臣の御用を承けたる總支配人ゴッド

フレイ・アイザックスは、合衆國に赴き、合衆國マルコニー會社の十萬株を懐にして還り、之をロンドンの市場に賣出した。其の以前に彼は其の兄弟ハルリー及びルーファス即ち當時の検事總長と密かに會見し、兩人の兄弟に一株一ポンド十六シルリングで之を分配することを諮つた。此に於てハルリーは五萬六千株を取り、其中よりルーファスはハルリーより一萬株を一株二ポンドで買受けた。然るに當時の大藏大臣ロイド・ジョージ即ち逓信大臣サミュエルに其の資金を提供すべきロイド・ジョージと及び大藏省の議會次官にして自由黨の機密費を預かつてゐるマスター・オブ・エリバンクとが、また此事に加擔した。

一九一二年四月、英國の市場では此株を三ポンド五シルリングで公開した。之が爲めに總支配人ゴッドフレイ、ハルリー、アイザックス兄弟及びロイド・ジョージ、エリバンクなどは何れも其株を賣拂ひ、皆な少からざる利益を得た。エリバンクは自分の財産ばかりでなく、自由黨の機密費をも使用して、又た相當の利益を得た。さて一九一二年



七月、逕信大臣サミュエルとマルコニー無線會社の總支配人ゴッドフリー・アイザックスとの間に於ける約束の承認案が下院に持出された。其處で問題が起つたのである。此後の騒ぎは詳しく云ふに及ばぬが、ロイド・ジョージなどは一時は知らぬ存ぜぬで通したが、やがて最早致し方なしといふことになり、其の調査委員の選定せらるゝや、檢事總長ルーファス・アイザックスは密かに委員に面會し、自分のみならず他の關係も亦た此事に關係あることを白狀し、ロイド・ジョージなどは、其事には手を染めたが寧ろ損をしたなど云ひ、細君の貯金帳さへも法廷に公開した。そのロイド・ジョージも英國のボア戦争の時には、チェンバレン一家が軍需品會社の大株主として、不當利益を得たといふ彈劾的發議を下院でしたこともあつた。昨是今非とは此事であらう。やがてはそれも龍頭蛇尾に終つた。固より政府の揉消し運動が成功した爲めでもある。

x  
抑もルーファス・アイザックスはアイザックス家三人兄弟の末弟にして、當初は株式市場をうろつき、仲買の眞似のやうなことをしてゐたが、既に刑事問題にかゝらんとし

たる事件を引起したこともあつたのを、奇蹟的に免れ、それより志を立て、法律家となり、辯護士となり、議院に入り、漸次成功して印度總督まで經上り、やがてはレーチング侯爵とまでなり、デズレリーが伯爵ビーコンスフィールドとなつたに比して、更らに一階陞つた位置を占めた。彼は最後には英國の高等法院民事部長になり、政黨員として其の凡有る得るものを得盡し、而して政黨以外に超然たる官職を占めて、最後まで之を確保した。然も彼をして茲に至らしめたものは、彼の才力は勿論であるが、それよりも彼の猶太的本能であることを忘れてはならぬ。

若し夫れ英國皇帝の誕生日に發表せらるゝ授爵、敍勳の一覽表を年代的に調査し、それが因縁由來を解説したらんには、悉くとは云はぬが、其の主なるものは、皆な政黨費に寄附したる金額の多少に依つて、其の爵位、勳章の階級も定まり、而して其の寄附者の何者たるを吟味すれば、其中には猶太人の金が、如何に動いてゐるか、自から明白であらう。ローズベリー卿は其の少年時代三つの希望を抱いてゐたと稱せられてゐる。第一は金持の女房を持つこと、第二はダービーの競馬で勝つこと、第三は首相の位地に陞



ること。彼は斯の如くにして世界第一と云うても差支ないロスチャイルド家の花婿となつた。ダービーの競馬でも勝つた。永くはなかつたが、暫時の間は首相ともなつた。ロスチャイルド家が猶太系であることは云ふまでもない。斯の如くにして猶太人の血は、英國の貴族の中心に、滾々として流れ入つてゐる。ローズベリー卿の婿は即ちクリュー侯爵である。猶太の血が何處まで流れて行くか想像に難くない。然も此れはたゞ一例である。

### 三、バルフォア宣言

曾てあるフランス人が云うた、クレマンソーからジョレスに至るまで、佛國のありと凡有る政治家に、猶太人の手の及ばぬものはないと。果して其の通りであつたか否かは保證の限りでないが、フランスが猶太政治家の爲めに、又た猶太金権の爲めに滅んだことは、我等が眼前に見る實物教育である。ドイツの如きも前皇帝ウイルヘルム二世は、當時の汽船王バルンを寵用すること殆んど其の叔父エドワード七世のキャッセルを寵用すると同様であつた。バルンは第一次世界大戦破裂の前後に自殺したが、何の爲めに自

殺したか判らない。彼が猶太の見地より英國とドイツとを、なるべく平和ならしめんと盡力しただけのことは間違ひなかつた。何れにしても世界何れの國も猶太人の手が動いてゐない所は無い。世人は英人セシル・ローズを以て英國の一大英雄と看做してゐる。彼、喜望峰より埃及のカイロに至るまでの幹線鐵道を企てたるが如き、其の構想は流石に雄大であつた。然しながら彼は南阿に於て猶太人ビートと握手することを避けることが出来なかつた。最初は闘うたが、とても勝つ見込が無かつたから握手した。かくてローズも亦た猶太人の捕虜となつた。さればローズが英國の政界に金を振蒔き、殊にアイルランド自治黨首領バーネルに向つて多大の黨費を貢ぎたるが如きも、また間接に見れば猶太人の金がローズを通してアイルランド黨を操縦したと考へられないことはない。斯く云へばとて我等はローズが直接にビートから借金して貢いだといふのではないが……。

更に茲に一言せねばならぬことはバルフォア宣言である。バルフォアは英吉利保守



黨の名門であつて、實にソルスベリー卿の姪である。彼は金もあり、位地もあり、學問もあり、容貌さへも秀麗であり、凡有る點に於て不足するところは無かつた。別に猶太人に依つて得なければならぬ必要は無かつたが、然も第一次世界大戦中に彼の所謂「宣言」が、英國には非常なる祟りを爲した。彼の宣言は今ま茲に詳しく話すまでもなく、一九一七年十一月二日ロスタチャイルド卿に向つて左の書翰を與へた。陛下の政府は、パレスチナに於て猶太人の爲めに一國を創立することを嘉みし、其の目的を達する爲めに最善の努力を使用するであらう。勿論其の爲めに從來パレスチナに於ける猶太人以外の人々の社會的及び宗教的の權利を妨害することなく、又た他國に於て猶太人の享有したる政治上の立場及び權利を妨げざる限りに於て……」

然るに此の條件附の文書は、不幸にして猶太人に對し、ただ英國が最善の力を以て、猶太人の爲めにパレスチナに一國を創造して呉れるものとの確信を與へ、其の爲めに猶太人は勇躍して第一次世界戦争の最中に英國側に加擔した。元來パレスチナなる土地は、

耶穌教に依つて世界に知られてゐるが、其の大半は英國のウエールズほどのもので、其の大半は全く饒瘠の土地であり、僅かに山羊や羊が住むだけのものである。若し之を開拓し灌漑すれば、若干利用が出来るとは云ふけれども、如何に利用しても百五十萬以上の人口を容るるには足らぬ土地である。然も當時既に百萬のアラビヤ人はパレスチナに定住してゐた。然るに此の宣言の爲めに一九二三年から一九三三年に至る十年間に、猶太人は八萬三千人より二十三萬人に増加した。アラビヤ人がいかで之を黙視す可き。此に於て猶太人とアラビヤ人との間に葛藤が起ることは必然の譯であつた。

當時英國では最初の最高委員に、曩に掲げた遞信大臣サー・ハーバート・サミュエルを任命した。これは彼が猶太人を治むるに適當の人としたのであらうが、然も猶太人を治むるに適當なる人は、必らずしもアラビヤ人を治むるに適當な人ではない。元來アラビヤ人にはまたローレンスが、英國政府の意を承けてアラビヤ人を懐柔し、苟くもアラビヤ人が英國に味方するに於ては、彼等に對して舊アラビヤ大領土を回復してやる



といふ約束をしてあり、その爲めにアラビヤ人は火水になつて英國に味方した。然るに英國は今や双方に約束して如何ともするを得ず、その爲めにローレンスもやがては非命の死を遂げた。何れにしても英國の團扇は猶太人の方に揚つたが、然し實力はアラビヤ人に在る。金を儲けることや、人を瞞すことならば、猶太人は一日は固より、百日の長があるが、戦争をすることはアラビヤ人にはかなはない。斯の如くにしてバレスチナは遂ひに今日に至るまで双方の約束は實行せられず、英國をして全く西亞細亞に於ける信用と勢力とを失墜せしむるに至つた。

如何に英國がバレスチナに於て虐政を布いたかに就ては、「英國の恐怖政治」と題するゲルト・グインシュ著の一書があつて、それが詳しく語つてゐる。そのいふところに依れば、バルフォアも嘔吐きであれば、ローレンスも嘔吐きであり、誰も彼も嘔吐きであると述べてゐる。英國人に辯護せしむれば、相當の申分もあらうが、とにかくバルフォア宣言の結果が如何にも重大であり、英國の西亞における信用と勢力との失墜が、こゝに

由來することは決して疑ひを容れぬ。然し之も詮じ来れば猶太人の力の現れたる一端に外ならない。實に英國を滅ぼすものは猶太の毒藥である。

### 英國文學と英國の興廢

#### (1) ヴィクトリア朝の文學

英文學者としてヴィクトリア朝の文學を語るものではない。但だ歴史上より見て、如何に文學が英國の盛衰隆替と關係あるかに就て聊か之を觀察せんとするに止まる。改めて理つて置くが、予は固より英國文學を語るほどの専門的知識は持つてゐない。さてヴィクトリア朝の初期から中期に掛けては、若し英文學の最高峰と云ふことが出来ぬならば、少くとも最も絢爛の時代であつたと云ふことが出来よう。之をエリザベス時代のそれと比較して、其の賑かにして且つ派手やかなることは、寧ろ勝るものがありと云うても差支あるまい。小説方面にはサツカレー、ヂッケンスあり、詩人としてはテニスン、ブラウニングあり、散文に於てはマコーレー、カーライルあり。其他文學何れの方



面に於ても、十指を屈するに遑あらぬほど、大家名家が輩出してゐる。而して其の文學も我等の眼から見て、概して健全にして、國運興隆の徵象でもあり、又た其の刺戟力でもあり、又た其の指導力でもあつた。

(2) マコーレー

試みに其の一二に就て語らんに、マコーレーの如きは、彼が生前餘りに人氣が多かつた爲めに、死後は随分彼の缺點短所を指摘する者が多かつたが、それにも拘らず彼の論文は今日に於て之を讀むも、確かに一種の自修教育の最高資料であり、其の歴史の如きは、彼の取扱うたる其の期間に於ては、何人も取つて之に代る者はあるまい。マコーレーは哲學者でなくして、寧ろ常識家である。反逆者でなくして寧ろ順應兒である。時代の尖端を往く者に非ずして時代と共に行く者である。然も彼は血性ある黨人にして、彼は終始一貫ウィッグ黨の勇將として、政界にも文壇にも其の手腕を揮うたる者である。彼の歴史と云はんより、彼の一切の作物に就て云へば、抑揚が過度であり、濃淡が過多であり、光明と陰翳とが過大であり、其の爲めに往々物議を招くものがあるが、然も彼ほ

ど文學的良心の健全にして且つ鋭敏なる者はなかつた。

彼は一事を敍せんとするにも、百卷の參考書を涉獵し、一件を記せんとするにも、尙ほ百里の道を踏査することを憚らなかつた。彼の文章は宛もドイツの大觀兵式を見るが如く、水際立つて壯觀美を呈してゐる。然も之は決して一氣呵成に出來上つたものではない。彼の原稿を大英博物館に見たる者は、何れも其の推敲の尋常ならざるに驚かぬ者はあるまい。彼は二十餘歳にしてミルトン論を世に出だし、一夜の中に天下を驚倒せしめたるより、六十餘歳、其の歴史の原稿を完成せずして逝つたまで、殆んど何等の變化を見るものがなかつた。言換ふれば進歩もしなかつたが、又た決して退歩もしなかつた。即ちバジョットが、「今日の彼は昔の彼であり、昔の彼は今日の彼である」と云つた通りである。彼はマルボロー公爵家の開祖チャーチルに對し、頗る辛辣の筆を揮つた。それが爲めに現英國首相チャーチルは自家の祖先の冤を雪ぐ爲め、渾身の力を擧げてマルボロー公傳を著作した。然もそれは微に入り細を穿ち、マコーレーの評したる文言に比す



れば、千倍と云はんよりも、寧ろ萬倍の文句を費してゐる。然し世間の多数は、依然チャーチルの辯護よりも、マコーレーの彈劾に賛成するであらう。所謂死せるマコーレー生けるチャーチルを奔らすとは此事であらう。

(3) カーライル

カーライルは凡有る點に於て、マコーレーと對蹠的位置を占めてゐる。彼は時代の反抗兒である。マコーレーは英國を天國と云はぬまでも、天國に向つて進み行きつつありと樂觀してゐたが、カーライルは地獄と云はざるまでも、地獄に向つて陥落しつゝありと悲觀してゐた。彼はマコーレーが議院政治に絶對の信用を置く如く、不信用を置いてゐた。彼は英吉利のデモクラシーを衆愚政治と看做し、殊に議論で日を暮すを亡國の兆候と看做し、其の爲めに彼は「雄辯は銀なり、沈黙は金なり」といふ警句さへも吐いた。但だ意外であるは、恰も不立文字を主とする禪家が幾多の語録を作成する如く、沈黙は金なりの説教をなす爲めに、等身以上の著述をなしたることである。然も矛盾は文士の常であつて、彼をのみ咎む可きではない。彼は偽善を憎み、氣取りを憎み、ぶるこ

とを憎んでゐた。所謂露堂々が彼の本旨であつた。而して彼は何よりも力の福音を宣傳した。彼の最も崇拜したる英雄は、英國に於てはクロムウェル、ドイツに於てはフレデリック大王であつた。彼の文章は佶屈聱牙であるが、彼の名著「佛國革命史」の如きは、果して佛國革命の真相を描きたるや否やは別として、此の驚天動地の大活動を描きて、人をして其の雰圍氣の中に在るの思ひを爲さしめたる大手筆に至つては、實に驚歎に餘りありと云はねばならぬ。彼が時としては力ださへあれば、暴力でも讚美するが如き語氣を漏らしたるに拘らず、彼の文章が世道人心を警醒するに與かつて力あつたことは、之を否定することが出來ない。縱令彼の意見と相反するものがあつても、他山の石たるには餘りあつた。

(4) テニスンとブラウニング

グイクトリア朝の詩人テニスンとブラウニングとの關係は、宛も又たマコーレーとカーライルの如きものであつた。我國でも明治十年より二十年にかけての時代には、テニスンのクリミアに於ける英國輕騎兵の突撃を歌うたる詩は、外山正一博士が翻譯して、



拔刀隊の歌と共に當時の青年には傳唱せられた。とにかく英國の勅選詩宗あつてより以來、彼ほど其職に適當の者はなかつたであらう。彼の思想は時代と伴ひ、彼の詩調は博  
大昌明にして、洋々として大雅の音がある。ブラウニングは幽奥にして深邃、所謂深  
人淺語なしと云ふべきものであつて、素人向きではないが、凡そ詩人として人心を指導  
する力を持つてゐたもの、ミルトン以後ウオズウォースを除けば、彼を推さねばなるま  
い。然も彼も亦た時勢の反抗兒と云はんよりも、超然として自己の立場を維持したるも  
の。カーライルの如く世人をして、彼は消化器病者であつた爲めに、斯の如く悲憤慷慨、  
世間に向つて冷嘲熱罵を浴せ掛くるのではないかと疑はしむるが如きものではなく、ブ  
ラウニングは唯だ彼の好む所に依つて其志を言うたのに過ぎなかつた。

(5) マシユニー・アーノルド

此の機會に於て我等はマシユニー・アーノルドに就て一言せねばならぬ。彼はラグビー  
校の校長アーノルド博士の長子にして、其の詩才はオックスフォード大學に在學中より  
既に秀拔であつた。彼はテニス、ブラウニングに比す可き大家ではない。彼の詩源は

深山の岩角より滲み出づるが如き清泉にして、長江大河一瀉千里のものではない。従つ  
て彼の詩囊も兩者に比すれば貧弱である。然も彼は苟くも作らず、作る物は實に希臘詩  
人の神髓を得たと稱せられてゐる。彼自身は一生を督學官として送り、教育行政に力を  
竭したるものにして、仙人でもなければ隱者でもない。寧ろ英吉利流の紳士として、完  
全に幾き教養と儀容と態度とを持つてゐた、云はゞ品の好き俗物とも云うて差支あるま  
す。然も彼の詩は實に精神の疲勞したる者に取つては、一種の靈藥であつた。彼の詩は  
ミルトンの大作の如く巨刃天を摩して揚るほどのものは無かつた。平たく云へば彼の哲  
學は諦めの哲學であつた。然もそれが彼の幽渺たる詩思を透して出で來る時には、人を  
して一誦三歎、絃外の音を聴くの思ひあらしめた。

彼は中途より詩を捨て、散文に入つた。彼の散文はまた一種の風調があつて、洗練の  
致を極めてゐる。彼は政治を論じ、神學を論じ、凡有る問題に立入つて、遠慮會釋なく  
英吉利の缺點を指摘した。然も彼が輕き皮肉にて之を刺戟する時には、何人も彼に向つ



て噴拳を振向くることは出来なかつた。或は彼は現代のバーナード・ショーの先容をなしたる者と云ふ者もあるも、アーノルドの皮肉とショーの皮肉とは、自から筋合が異なつて、ショーの皮肉は熊蜂が螫す如く、聊か其の毒氣を感ぜざるを得ないものがある。カーライルは力の福音を以て英吉利人に宣傳したが、アーノルドは甘美と光明とを合言葉として、英吉利人の鈍重、無骨、己惚れ、功利一點張り、物質萬能を警醒した。彼も決して一通りや二通りで安心する漢でなく、随分繰返し、随分手酷しく遣りつけたが、然しそれが實際どれ程の實効を英吉利人に與へたるかは、我等の知る限りではない。寧ろ英吉利人はこれを除け者として、葬り去つたのではあるまいかと思ふ。

(6) ジョン・ラスキン

更らにヴィクトリア時代に於て記憶す可き一人がある。それはラスキンである。ラスキンは最もカーライルの感化を多く受けたる一人にして、或はカーライルの門人と云うても、當人は不満はないであらうが、然し彼には彼の獨特の立場がある。彼はロンドンの銘酒仲買商の一人息子で、父母の鍾愛を一身に得たる、所謂のお坊ちやんであつた。

此のお坊ちやん氣質は、彼が八十餘歳の死に至るまで一生抜け切れなかつた。彼は繪畫の批評家として世に出でた。彼の大著「近世畫家」の若干は、彼がオックスフォード在學中の作物である。彼が如何に早熟であつたかは、之を以ても知ることが出来る。

彼はカーライルに比すれば、美を感知する極めて精緻纖細なる官能を持つてゐた。彼は野に咲ける一枝の百合にも、山を出づる一片の雲にも、宇宙の限りなき美を觀取した。彼の美は單に美と云ふばかりでなく、彼は眞、善、美を併せて、始めて之を美と心得てゐた。彼の美の中には善があり、善の中には眞があり、眞の中には美があるといふ。此の眞、善、美は、彼に於ては一貫したるものにして、彼は常に之を美の一字に總括してゐた。従つて彼は獨善の生活を以て自から満足するを欲せず、兼濟を心掛けてゐた。そこで彼は社會主義には大反對であつたが、同時に労働者の親友を以て任じた。彼が自からセント・ジョージ・ギルドを造つて、労働者の爲めに會館を設け、自から其の講演を負擔したるが如きは其の一端である。